

# 平成29年度宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業報告書

宮城県  
平成30年3月

# 目次

はじめに	1
事業要旨	2
第1章 平成29年度宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業について	
1 平成28年度宮城県発達障害児者支援開発事業への取組	4
2 平成28年度事業の成果と課題	5
3 平成29年度宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業について	6
4 事業スケジュール	7
第2章 事業成果	
1 1歳6か月健診における健診ツールの定着支援	
(1) M-CHAT について	9
(2) 事業日程	9
(3) M-CHAT 導入結果の分析	10
(4) 県内への普及啓発	11
1歳6か月児健診にMチャットを導入して	13
2 現任者スキルアップ研修及び保育等現場へのフィードバック支援	
(1) のびっこクラブ	
イ 座学及び自立課題づくり	14
ロ 参加者の感想	15
ハ 保護者の「のびっこクラブ」参加前後のアンケート調査の分析	21
ニ 現任者の「のびっこクラブ」参加前後のアンケート調査の分析	21
ホ スーパーバイザーの「のびっこクラブ」参加前後のアンケート調査の分析	22
(2) のびっこクラブフォローアップ教室	
イ 保護者の感想	23
ロ 保護者の「のびっこクラブフォローアップ教室」参加前後のアンケート調査の分析	25
(3) スーパーバイザー研修	
イ スーパーバイザーの感想	26
ロ スーパーバイザーの「スーパーバイザー研修」参加前後のアンケート調査の分析	28
(4) その他	
イ 市町村体制強化研修	29
ロ 保育所長・幼稚園長・児童館長アンケート調査結果	30
ハ 代替保育士・幼稚園教諭アンケート調査結果	33
「のびっこクラブ」に参加して Aグループ	35
「のびっこクラブ」を経験しての感想 Bグループ	36
スーパーバイザー研修での学びを通して	37
3 ペアレント・メンターの育成・活動支援	
(1) ペアレント・メンター育成の取組経過及び概要	39
(2) ペアレント・メンター研修及び活動支援	39
(3) ペアレント・メンター検討会	40
ペアレント・メンター養成研修に参加して	41
第3章 考察	42
おわりに	43
参考資料	
平成29年度宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業実施要綱等	45

以下のホームページに本事業に関する情報を掲載しているので、御参照ください。

[H29-hattatsumodel/soshiki/syoufuku/h29-hattatsumodel.html](http://H29-hattatsumodel/soshiki/syoufuku/h29-hattatsumodel.html)

本報告書、現任者研修（のびっこクラブ）記録、のびっこクラブの様子（映像）を掲載。

## はじめに

発達支援に関するニーズは保健、医療、福祉、教育など様々な分野で高まっており、早期に発見し、早期に療育を行うことが発達の促進、二次障害の予防などの観点から有効であることが知られてきています。

宮城県では、平成28年度からの2年間厚生労働省の発達障害児者地域生活支援モデル事業の採択を受け、社会資源の限られる地域でも有効な仕組み作りを目指して、松島町をモデル地域に、早期における発達支援を地元の支援者や保護者が共に学び実践するとともに、普及啓発の地域発信に取り組んできました。

昨年度は①健診ツールの定着支援、②現任者スキルアップ研修の支援、③ペアレント・メンター育成支援の3つの仕組みづくりに着手しました。2年目となる平成29年度は、1年目の取り組みをさらに発展させるため、①1歳6か月健康診査にスクリーニングツールを導入し、発達の特性についての評価を行う「健診ツールの定着支援」に加え、当該取り組みについて県内への普及促進活動、②子育て支援センター（児童館）で実施する療育支援を保育所・幼稚園に浸透させるため、昨年度の現任スキルアップ研修修了者をスーパーバイザーとして育成・配置し、保育等現場でフィードバックさせる「現任者スキルアップ研修及び保育等現場へのフィードバック支援」、③発達の気になる子どもを育てた先輩保護者をペアレント・メンターとして育成及びスキルアップ研修を実施し、子育てに悩む保護者支援に繋げる「ペアレント・メンター育成・活動支援」の3つに取り組み、松島町における早期発見・早期療育の定着と、他自治体への普及啓発を推進してきました。

身近な地域で早期の発達支援を受けられる体制を整備していく上で、松島町における取り組みは参考となるものと確信しております。松島町での実践を県内及び全国に発信し、地域における支援構築の参考にして頂ければ幸いです。

本事業の実施に当たっては、厚生労働省、松島町、松島町教育委員会、社会福祉法人松島町社会福祉協議会をはじめとした様々な関係機関の御支援を賜りました。本事業に御協力頂いた全ての関係者に心から感謝申し上げます。

平成30年3月

宮城県保健福祉部参事兼障害福祉課長 佐藤謙一

## 事業要旨

### 1 事業目的及び事業実施内容

宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業（以下「モデル事業」という。）では「地域人材を活用したスーパーバイザー（以下「SV」という。）体制の導入により、保育所等の療育の平準化を図り、松島町における療育システムの定着と、県内への普及啓発を推進すること」を目的に、松島町をモデル地域とし、社会資源の限られる地域でも有効な仕組みづくりの検討を行った。

モデル事業は、①1歳6か月健康診査（以下「健診」という。）で、発達の特徴を捉えるアセスメントツールを独自に活用してスクリーニングを行うとともに、県内への普及を図る「健診ツールの定着支援」、②子育て支援センター（児童館）での療育を保育所・幼稚園での支援と連動させるため、昨年度の現任者研修修了者をスーパーバイザー（SV）として育成・配置し、支援の平準化を図る「現任者スキルアップ研修及び保育等現場へのフィードバック支援」、③発達が気になる子どもを育てた先輩保護者をペアレント・メンターとして育成及びスキルアップ研修を実施し、子育てに悩む保護者支援につなげる「ペアレント・メンターの育成・活動支援」を3本柱として取り組んだ。

### 2 事業成果

#### (1) 1歳6か月健診における健診ツールの定着支援

松島町における1歳6か月健診（以下「健診」という。）で、4月から2月までの計6回、M-CHATによる発達スクリーニング（以下「M-CHAT」という。）を実施した。平成28年度からの累計107人のうち、17人（15.9%）が陽性で、うち11人（64.7%）が要フォローであったことから、経過を見守ることとしている。

実施した保健師からは、「M-CHATの点数を確認しながら問診ができるので効果的である。」「基準が決まっているので保健師の経験年数を問わずツールとして有効でありスクリーニングの精度が上がった。」などの声があり、健診場面での有用性が確認された一方、M-CHATの点数だけでなく、健診項目や母子関係、行動観察等から総合的に判断する必要性を指摘する声もあり、アセスメント検討会を開催して結果分析を行った。

#### (2) 現任者スキルアップ研修及び保育等現場へのフィードバック支援

6月から8月にかけて座学を3回実施し、8月から2月に発達が気になる子の療育教室であり、現任の保育士・幼稚園教諭（以下「現任者」という。）の療育支援のスキルアップをねらいとしたOJT（以下「のびっこクラブ」という。）を子育て支援センター（児童館）において、2グループ各5回ずつ実施した。参加者は計267名である。

「のびっこクラブ」に参加した現任者、保護者及びスーパーバイザーに対しアンケートを行った結果、保護者においては、全体的に楽しく参加する子どもの成長を感じながら、具体的な関わりを学ぶことで保護者自身の気持ちが安定していく様子が示された。

現任者では、集団目標と個別目標の設定、チームアプローチ、小集団の重要性などに気づきがあったことが示された。

現任者へのOJT指導者と、療育支援の取り組みを現任者が勤務する保育所・幼稚園へフィードバックさせる役割を担ったスーパーバイザーは、具体的な支援法や考え方を、子どもの観察、情報収集、これまでの経験に基づき、現任者に伝える役割を果たしたことが、アンケート結果から読み取れた。

保護者6人を対象に事業前後で行った発達理解、行動理解、興味等のアンケート結果及び気分や感情の状態を測定するPOMS短縮版をそれぞれ実施した結果、「子どもの成長を促すための関わり方を理解している」の項目において研修前後で理解の深まりが見られ、疲労を示す値の低下が認められた。

現任者6人を対象に事業前後で行ったアンケート結果では、「療育課題に関する工夫」、「一人一人に応じた支援への配慮（環境調整）」の2項目で有意に自信が増している。繰り返し取り組んだ活動についての自信が増している様子が窺え、昨年度、現任者に行ったアンケート調査と同様の傾向を

示している。

スーパーバイザー4人に対するアンケート結果では、総じて有意な差が見られなかったが、「療育課題等における具体的な工夫」で自信が増すことについて有意傾向が見られた。現任者でも同様の傾向が見られたが、スーパーバイザーの方が有意差は小さい。これは、現任者への技術伝達における熱意の高まりと葛藤によるものと思われる。

なお、昨年度実施した「のびっこクラブ」に参加した保護者を対象にフォローアップ教室を開催したが、アンケート結果では、保護者間の交流を通して不安感を解消している様子が窺われた。

フォローアップ教室参加保護者3人を対象に事業前後で行ったアンケート及びPOMS短縮版実施結果では、対象者が少なかったためか有意差は見られなかった。

スーパーバイザー研修に参加したスーパーバイザーの毎回アンケートでは、当初不安だったが、シート記載を通して具体的な観察や目標の記述、職員間の共有意識が芽生え、「のびっこクラブ」での支援実践が現場での支援に活かされているとの気づきに繋がっている。

スーパーバイザー7人を対象に事業前後で行ったアンケート結果では有意差がなかったものの、「理論や実践の説明」と「子ども1人1人に応じた支援への配慮」で有意傾向は見られた。「のびっこクラブ」や保育所、幼稚園でスーパーバイザーとして情報共有を意識したことで理論や実践の説明で自信が増す傾向が見られた。

市町村体制強化事業で毎回「のびっこクラブ」に参加した現任者6人のアンケート結果では、集団と個別、環境整備などの気づきが見られている。

事業終了後に保育所長等7人の管理者向けに行ったアンケート結果では、現任者、スーパーバイザーともに理解の深まりを感じており、スーパーバイザーに対してその傾向が強い。代替職員の配置を高く評価しており、2年間の松島町での取組により発達支援が定着し、質の向上に寄与したと捉えている。

事業終了後に代替保育士等5人に行ったアンケート結果では、依頼の仕方、事前説明、賃金、依頼頻度ともに適切と捉え、代替保育士等の配置についても高く評価している。さらに、代替保育士等として勤務する仕事の不安はほとんどなく、職場のコミュニケーションや子どもの対応で困難さを感じることなく支援に当たることができ、職場の配慮の下、やり甲斐を感じながら勤務いただいた。

座学及び「のびっこクラブ」に参加した6人の現任者には「発達支援者基礎講座修了証書」を「スーパーバイザー7人には「発達支援者スーパーバイザー講座修了証書」を授与した。

### (3) ペアレント・メンターの育成・活動支援

11月から1月にかけてペアレント・メンター養成研修基礎講座とフォローアップ講座を実施し、計43名の参加があった。養成研修基礎講座では8名が修了し、昨年度から養成したペアレント・メンターは計25人となった。このうち15人を対象に養成研修フォローアップ講座を実施した。

また、養成したペアレント・メンターの活動支援として、本モデル事業フォローアップ教室への参加をはじめ、児童相談所が主催する普及啓発研修会など延べ8人、計10回の派遣実績があったほか、ペアレント・メンター検討会において宮城版の事業パンフレットの作成を行い、平成30年度からのペアレント・メンター派遣事業化に向けた方向性を示すことができた。

## 3 考察

松島町における2年間のモデル事業の取組を通して、以下の3点における効果が認められた。

- ① 健診において発達のアセスメントを継続することで、17人の陽性、うち11人が要フォローとなり、発達が気になる子の早期発見に繋がった。また、市町村への普及に向け、県内の母子保健担当保健師の発達評価における質の向上を目的とした研修を開催した。
- ② 子育て支援センター(児童館)における療育支援が定着化し、また、保育所・幼稚園においても、発達の療育が浸透しつつある。
- ③ 発達が気になる児童の育児に悩む保護者への支援として、ペアレント・メンターが活躍する仕組みのスタートラインが整備された。

# 第1章 平成29年度宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業について

## 1 平成28年度宮城県発達障害児者支援開発事業への取組

平成28年～29年の二年間にわたる事業において、平成28年度は「保育士等として従事している方々に、効果的な専門知識やスキルを保護者と協働し習得していただく仕組みづくり」に取り組んだ。モデル地域とした松島町は人口約1万5千人の地方都市で、社会資源に限られる地域においても有効となる支援手法の確立をねらいとした。

事業は①健診ツールの導入支援、②現任者スキルアップ研修の支援、③ペアレント・メンターの育成支援の三本柱で構成した。

事業1年目では、松島町の健診で発達支援が必要と判断した親子を、個別相談を通じて「のびっこクラブ」に繋げた。「のびっこクラブ」では、現任者が、定期的に勤務時間内に療育支援を通じてOJTとして取り組み、その間、松島町の保育所・幼稚園を退職した保育士・幼稚園教諭が代替保育士等として対応した。保護者とともに、現任者が療育支援のスキルアップを図りながら、将来的な二次障害の発生予防を見据えて早期療育に取り組むとともに、発達障害児の育児経験を有する保護者等を対象に、ペアレント・メンター養成研修を実施した。

### <厚生労働省モデル事業> 宮城県発達障害児者支援開発事業について

#### 1 事業の概要

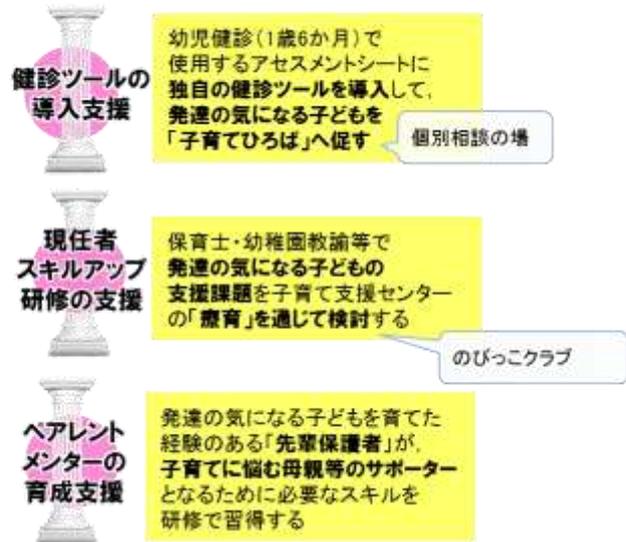
保育士等として従事している方々に、効果的な発達障害支援を行うための専門知識やスキルを保護者と協働しながら習得いただく仕組みづくりを行う



#### 2 事業実施スキーム



#### 3 事業の“3本柱” (特徴等)



## 2 平成28年度事業の成果と課題

### ① 健診ツールの定着支援

健診を行った計2回、延べ27人にM-CHATを実施し、うち8人が陽性(29.6%)、うち3人(37.5%)が要フォローとなり、その後の経過を見守ることとした。健診ツールの導入・定着に向け、専門性を有する職員の配置等による市町村体制整備や、母子保健担当保健師と保育士等との協働体制の確立が、課題として挙げられた。

### ② 現任者スキルアップ支援

座学や、「のびっこクラブ」による現任者支援を行った結果、243人の参加者が得られた。

保護者に対して実施したアンケート結果では、「子どもの健やかな成長へ繋がった。」や、「のびっこクラブを通して、安心感に繋がった。」という意見が見られた。また「子どものために、手厚い支援が受けられる仙台市への移住を考えていたが、松島町で十分な支援が受けられると思った。」という声もあった。

保護者に対し事業前後に行った気分尺度検査とアンケート調査結果では対象者数の少なさとデータのばらつきによるものか、有意差は見られなかった。

現任者へのアンケート結果からは、「日頃、園で消極的な子どもがのびっこクラブで自信を持って課題に取り組み、できることが多くなり、小集団による療育の結果として、子どもたちに学びの姿勢が感じられる」との感想があった。なお、「発達支援に関する知識」、「療育課題の工夫」、「環境調整」の3つの調査項目で自信が増す傾向が見られた。

管理者に対し行ったアンケート結果では、「療育課題に関する工夫」、3つの調査項目で現任者による理解の深まりを実感し、園活動に自立課題を取り入れて子どもの切り替えを図る取り組みなどスキルや意識の高揚についての言及があった。

代替保育士・幼稚園教諭アンケートでは、子どもや後輩職員、地域への貢献に対する喜びが示された。

現任者スキルアップ支援の課題としては「学んだ知識等を保育の現場で活用していくためには、更なるスキルアップが必要」、「のびっこクラブを活用しての更なる現任者養成と、継続した保護者支援の仕組み作りが必要」、「現任者をスーパーバイザーとして活用した仕組みを構築するべき」などが挙げられた。

### ③ ペアレント・メンターの育成支援

ペアレント・メンター育成支援では、特定非営利活動法人日本ペアレント・メンター研究会事務局長で鳴門教育大学大学院の小倉正義准教授を講師に迎え、啓発研修、養成研修を行った結果、74人の参加が得られ、最終的に、養成研修基礎講座に参加した保護者17人に修了証書を授与した。また、ペアレント・メンター検討会を開催し事業化に向けた検討を行ったが、課題として、継続育成のための研修実施と、育成したメンターのスキルアップが挙げられた。

各種会議の実施、事業報告会の実施、報告書郵送、ホームページによる情報発信も実施した。

県全体として、早期支援体制未整備の自治体に対して、松島町での支援スキームを広めていく普及拡大を図ることが今後の課題である。

	平成28年度事業成果	課題
支援ツールの導入支援	2回 27人(M-CHATを1歳6か月健診に導入) (8人陽性・3人要フォロー)	○簡易アセスメントを地域で行える体制の整備 ○健診後の保健師支援と児童館・保育所・幼稚園等の支援の連携
現任者スキルアップの支援	15日 243人(座学、実践含む) (保護者) 子どもの成長に気づき安心感。 POMSアンケート結果は事業前後で有意差なし。 (現任者) 小集団での子どもの変化に気づき、 発達支援の知識、療育課題の工夫、環境調整は 自信が増す傾向。 (所長、園長等アンケート) 療育、発達支援、アセスメントスキル等の深まりを 実感。代替職員配置への好感。園活動での自立 課題の活用。 (代替保育士等アンケート) 事業への好感。子どもや職員役に立てる喜び。	○学んだ知識、経験を保育所や幼稚園などの現場で確 実に活用していくためのスキルアップ ○療育の場を利用した新たな現任者の研修と継続した保 護者支援の仕組み作り ○昨年度現任者をスーパーバイザーとして活用した仕組 み作り
ペアレント・メンターの育成支援	3回 74人 基礎講座修了証書授与者 17人	○ペアレント・メンターの継続育成 ○育成したメンターのスキルアップ
会議等	企画推進委員会 2回 37人 アセスメント検討会 5回39人 ペアレント・メンター検討会 2回18人	-
モデル事業の普及	事業報告会①松島 1回 130人 報告書送付 200部(郡連府農、政令市、県内市 町村等) ホームページによる情報発信 (報告書、のびっこ通信、映像等)	○支援体制が未整備の自治体に対して、松島での支援 スキームの汎用性を進めていくこと。

### 3 平成29年度宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業について

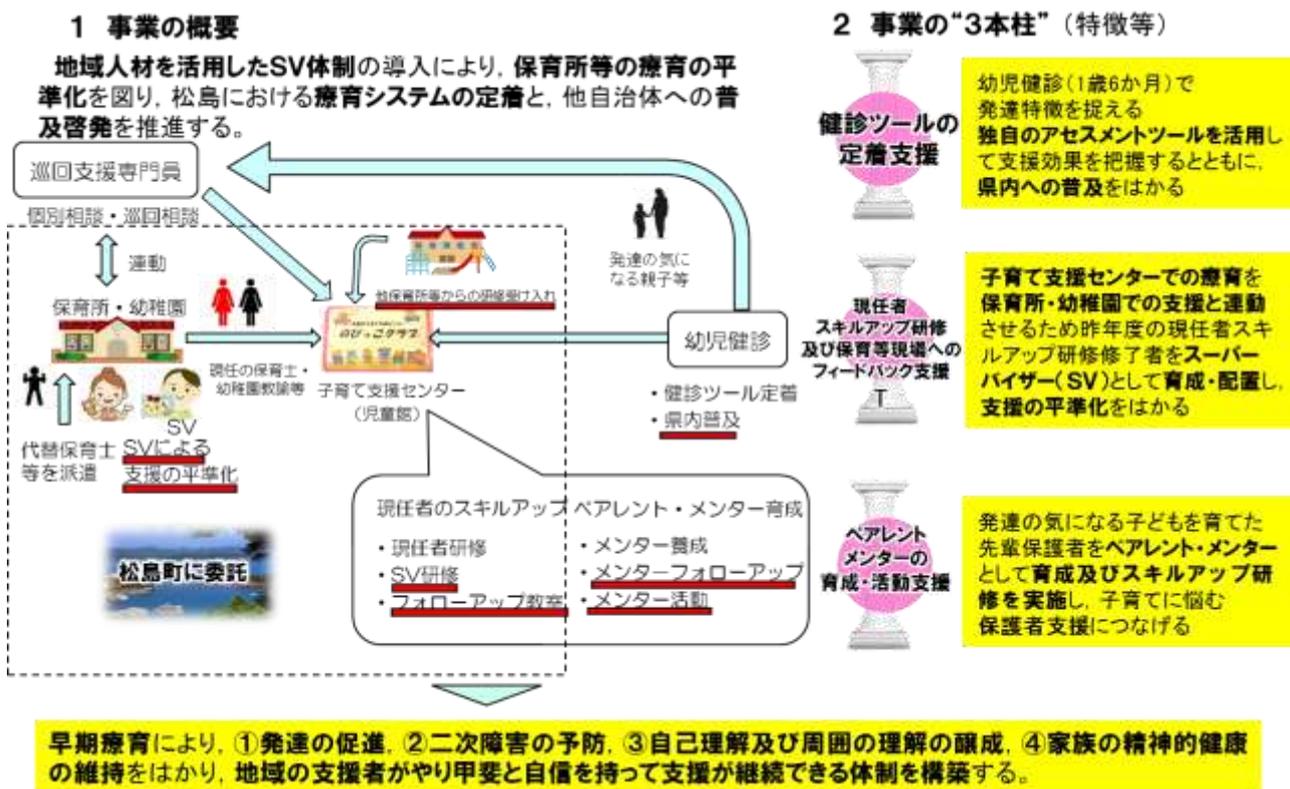
平成28年度の事業課題から、平成29年度事業では「地域人材を活用したスーパーバイザー体制の導入により、保育所等への療育の浸透及び平準化を図り、松島町における療育システムの定着と、他自治体への普及啓発の推進」に取り組んだ。赤下線が特に力を入れて取り組んだ事業である。

「健診ツールの定着支援」では、健診において、M-CHATを継続的に実施するとともに、県内自治体への普及を図った。

「現任者スキルアップと保育等現場へのフィードバック支援」では、「のびっこクラブ」において現任者による療育支援OJTを継続するとともに、日頃の現場との連動を図るため、松島町で実施している巡回支援専門員整備事業と併行活動させながら、昨年度の現任者をスーパーバイザーとして育成・配置（「のびっこクラブ」及び保育所・幼稚園に）し、支援の平準化を図った。県内他市町村の保育所等から研修生の受け入れも行ったほか、継続支援のニーズを受け、昨年「のびっこクラブ」に参加した保護者を対象にしたフォローアップ教室を開催した。代替保育士等の配置も継続した。なお、点線の部分は松島町に主体的な取り組みを促すため、同町への委託とした。

ペアレント・メンターの育成・活動支援では、新しいメンターの育成とスキルアップ研修を実施するとともに、子育てに悩む保護者支援に繋げた。

早期療育により①発達の促進、②二次障害の予防、③自己理解及び周囲理解の醸成、④家族の精神的健康の維持を図り、地域の支援者がやり甲斐と自信を持って支援が継続できる体制構築を目指した。



#### 4 事業スケジュール

事業スケジュールは表1のとおりである。企画・推進委員会は事業開始後の8月と事業終了後の3月に開催した。

健診ツールの導入については、「のびっこクラブ」や健診でのアセスメントツールの導入効果を検討するアセスメント検討会を3回開催、M-CHATは松島町の1歳6か月健診で計6回実施した。

現任者スキルアップ研修及び保育等現場へのフィードバック支援では、現任者による療育支援、スーパーバイザー育成・配置、フォローアップ教室を実施した。

ペアレント・メンターの養成は、養成研修の基礎講座及び応用研修を実施した。あわせて、ペアレント・メンター検討会を開催し、ペアレント・メンター制度の事業化に向けた検討を行った。

また、市町村体制強化事業として、県内の保育所・幼稚園から「のびっこクラブ」への研修生の受け入れを行った。

表1 事業スケジュール

事業項目	内容	参加者	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
健診	アセスメント活用検討	(保) 児童福祉課職員 児童福祉課職員 中井心保健相談所職員 中山高保健相談所職員 健康長寿課職員	1歳6月 健診 4/4(水) 13名				1歳6月 健診 8/30 (水) 15名	① 9/30 (水) 16名	1歳6月 健診 10/3 (水) 16名		1歳6月 健診 12/5 (水) 13名		1歳6月 健診 2/6 (水) 15名	② ③ 1/12 (水) 5名 1/17 (水) 5名
保健士・幼稚園教諭・保育児 認定職員・保母師向け研修	保育士・幼稚園教諭・保育児 認定職員・保母師向け研修 を行う。	(松島町) 保育士 幼稚園教諭 希望園職員 保母師	① 6/2(水) AM17名 PM19名	② 7/4(水) AM17名 PM15名	③ 8/30 (水) PM21名		アセスメント検討会(作成)							
Aグループ のびっくクラブ 4歳以上	発達支援の実践や検討 を通して、発達の子どもの 発達やその親への支援 課題や支障のあり方を 共有する。	一幼 武田志保先生 高保 飯川美希先生 磯保 石井恵美先生 リーダー 二幼 佐藤理子先生 中澤亜由美先生		① 8/21 (水) AM8名 PM10名					② 10/7 (水) AM8名 PM8名		③ 11/21 (水) AM8名 PM8名		④ 1/16 (水) AM8名 PM8名	
Bグループ のびっくクラブ 5歳以上	発達支援の実践や検討 を通して、発達の子どもの 発達やその親への支援 課題や支障のあり方を 共有する。	二幼 長谷川麗先生 五幼 吉田大輝先生 松保 岩佐夏海先生 リーダー 高保 赤間悠先生 松見 尾形優太先生		① 9/28 (水) AM7名 PM10名					② 10/21 (水) 7名				④ 1/23 (水) 6名	
のびっくクラブ フォローアップ教室	28年度事業に参加した 保護者を対象にしたフォロー アップを行う。	児童館職員 いるかの委員会 児童福祉課職員			① 8/1 (水) 7名									
スーパーハイパー 研修	28年度のびっくクラブ研 修現任者を対象とした研 修を行う。	高保 石川ひなみ先生 高保 赤間悠先生 松保 佐藤理子先生 一幼 和泉美佳先生 二幼 渡邊理加先生 中澤亜由美先生 松見 尾形優太先生					① 9/12 (水) 7名		② 11/7 (水) 7名					
メン タ ヘル ス 業 者	発達の子どもの 育てる環境のある先輩 保護者が子育てに悩む 母親等のサポートにな るために必要なスキルを 習得する。	発達支援(者)の子育 て経験のある親 支援機関の職員等						① 9/28 (水) 17名						
市町村体制強化研修	①出前講座 ②体験講座	①市町村職員等 ②保育士、幼稚園教諭			② 10/7 (水) 11名						④ 11/21 (水) 11名			
委員会 業務	モデル事業の実施計画 策定、モデル事業の実施 状況等の評価やとりま め等を行う。	企画・推進委員会 モデル事業マネージャー					① 8/25 (金) 17名							② 2/22 (水)
事務 業務 管理	モデル事業の準備を把握 しながら、発達障害児者 の支援ニーズや成長段階 に応じた支援手法の開 発、分析及び検証等を行 う。	県障害福祉課												

## 第2章 事業成果

### 1 1歳6か月健診における健診ツール定着支援

#### (1) M-CHAT (Modified Checklist for Autism in Toddlers) について

M-CHAT は、国立精神・神経医療研究センター（以下、「国立精研」という）に許諾を得た上で、平成28年度から松島町での健診で使用してきた。

M-CHAT は生後16か月から30か月の自閉スペクトラム症のスクリーニングとして欧米で開発され、23項目（うち重要10項目）から成り、保護者による回答で行われるものである。短時間で簡易に実施ができ、国立精研の了解を取れば自治体の発達健診場面に限り無料で使用できる。

#### 日本版 M-CHAT について

日本語版 M-CHAT (The Japanese version of the M-CHAT)

お子さんの日常生活の様子について、もっとも質問紙においてはまるまるの○で答えてください。すべての質問紙には答えるようにお願いいたします。もし、質問紙の行動をめぐったにしないと思われる場合は(たとえば、1歳しか見た覚えがないなど)、お子さんのそのような行動をしない「いいえ」を最もふりよごして回答ください。項目7, 9, 17, 23 については念をこらして答えてください。

1. お子さんをブランコのように揺らしたり、ひざの上で座すると喜びますか?	はい・いいえ
2. 顔の表情に興味がありますか?	はい・いいえ
3. 階段など、高いの上に乗・上ることが好きですか?	はい・いいえ
4. イチャイチャをすると喜びますか?	はい・いいえ
5. 電話の受話器を耳におでしてしゃべるまねをしたり、人形やその他のモノを乗ってごっこ遊びをしますか?	はい・いいえ
6. 何か面白いモノがある時、指をさして要求しますか?	はい・いいえ
7. 何かに興味を持った時、指をさして指さすようになりますか?	はい・いいえ
8. アルミや木などのおもちゃを、目に入れたり、さわったり、落としたりする遊びではなく、おもちゃに合った遊び方をしますか?	はい・いいえ
9. あなたが見ているモノがある時、それを見せに持ってきますか?	はい・いいえ
10. 1, 2秒より長く、あなたの方を見つめますか?	はい・いいえ
11. ある物の音に、とくに過敏に反応して手舞足蹈になりますか? (耳をふさぐなど)	はい・いいえ
12. あなたがほかの子の顔をみたり、笑いかけると、笑顔を返してきますか?	はい・いいえ
13. あなたがすることをおぼえますか? (たとえば、目をさがらせてみせるなど、言葉をおぼえさせますか?)	はい・いいえ
14. あなたが名前を呼ぶと、反応しますか?	はい・いいえ
15. あなたが視線の中の離れたところにあるおもちゃを指さすと、お子さんはその方向を見ますか?	はい・いいえ
16. お子さんは歩きますか?	はい・いいえ
17. あなたが見ているモノを、お子さんも一緒に見ますか?	はい・いいえ
18. 顔の近くで指をむらむら動かすなどの変わった振る舞いがありますか?	はい・いいえ
19. あなたの任務を、自分の方に向こうとしますか?	はい・いいえ
20. お子さんの耳が聞こえないわけではないかと心配されたことがありますか?	はい・いいえ
21. 言われたことばを覚えていませんか?	はい・いいえ
22. 特別な「声」をじーっと見つめたり、目をよくひたすら見つめることがありますか?	はい・いいえ
23. いつもと違うことがある時、あなたの方を見て反応を確かめますか?	はい・いいえ

M-CHAT copyright 1999 by Dana Ruben, Deborah Fein, & Marianne Barton. Authorized translation by Yoko Kawan, National Institute of Mental Health, NIMH, Japan.

M-CHATの著作権はDana Ruben, Deborah Fein, Marianne Bartonにあります。この日本語版は、国立精神・神経センター精神保健研究所から、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所から正式に使用許可を得たものです。

7. 何かに興味を持った時、指をさして指さすようになりますか?



9. あなたが見ているモノがある時、それを見せに持ってきますか?



17. あなたが見ているモノを、お子さんも一緒に見ますか?



23. いつもと違うことがある時、あなたの方を見て反応を確かめますか?



※国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・思春期精神保健部に承諾を得て転載

#### (2) 事業日程

健診ツールの導入にあたっては、学識経験者や松島町担当者、県子育て支援担当部局等が集まって「アセスメント検討会」を3回開催し、アセスメントツールの導入効果の検討を行った。健診においてM-CHATを実施したのは、平成28年度は2回、平成29年度は6回の計8回である。

アセスメント検討会、健診については表2のとおり実施した。

表2 アセスメント検討会及び1歳6か月健診について

	日時	内容	参加者
第1回	平成29年8月30日(水) 午前10時～午後0時	アセスメント検討会第1回 1 モデル事業について 2 健診におけるアセスメントの検討 3 「のびっこクラブ」におけるアセスメントシートの検討	8人
第2回	平成30年3月1日(木) 午後3時～午後5時	アセスメント検討会第2回 1 健診におけるアセスメント結果の分析 2 「のびっこクラブ」におけるアセスメント結果の分析	6人
第3回	平成30年3月12日(月) 午後3時～午後5時	アセスメント検討会第3回 1 アセスメント結果のまとめ 2 その他	7人

	日時	内容	対象者
健診1	平成29年4月4日(火) 午後0時30分～午後3時	松島町1歳6か月健診においてM-CHAT実施	13人
健診2	平成29年6月20日(火) 午後0時30分～午後3時	松島町1歳6か月健診においてM-CHAT実施	15人
健診3	平成29年8月1日(火) 午後0時30分～午後3時	松島町1歳6か月健診においてM-CHAT実施	6人
健診4	平成29年10月3日(火) 午後0時30分～午後3時	松島町1歳6か月健診においてM-CHAT実施	16人
健診5	平成29年12月5日(火) 午後0時30分～午後3時	松島町1歳6か月健診においてM-CHAT実施	13人
健診6	平成30年2月6日(火) 午後0時30分～午後3時	松島町1歳6か月健診においてM-CHAT実施	15人

### (3) M-CHAT 導入結果の分析

M-CHATの結果は表3のとおりである。松島町の1歳6か月健診において、2年間で計107人にM-CHATを行った。17人(15.9%)が陽性(全体項目3点以上9人,重要項目1点以上17人)となっている。このうち、要フォローとなったのは27人(25.2%)であった。

M-CHATが陽性で、要フォローとなったのは17人中11人で64.7%と高い割合であった。男女比較では、男がM-CHAT陽性となる割合が高いが、統計的には有意差は見られなかった。(p>0.1,フィッシャー直接確率検定)

松島町の保健師からは、「健診の流れに影響することなく実施できた。」「問診の前にあらかじめ合計点等の記載があるのが良い。」「基準が決まっているので活用がしやすい。」との意見の一方で、「M-CHATの結果のみならず保護者の困り感等の結果から総合的に判断する必要がある。」との意見もあった。M-CHATを導入すると健診における発達評価の質向上に繋がり、有用性が確認された。また、採点者を配置したことで、時間的な負担は見られなかった。

今後の課題としては、保健師が疑問や確認したい事項がある場合の対応者、フォロー体制、切れ目のない支援による将来的な二次障害の予防などが挙げられる。

表3 M-CHATの実施結果

平成28年度

受診者	M-CHAT 3/23以上		M-CHAT 1/10以上		M-CHAT陽性		要フォロー者		M-CHAT陽性のうち要フォロー	
27	3	11.1%	8	29.6%	8	29.6%	5	18.5%	3	37.5%

平成29年度

受診者	M-CHAT 3/23以上		M-CHAT 1/10以上		M-CHAT陽性		要フォロー者		M-CHAT陽性のうち要フォロー	
80	6	7.5%	9	11.3%	9	11.3%	22	27.5%	8	88.9%

平成28年12月～平成30年2月

受診者	M-CHAT 3/23以上		M-CHAT 1/10以上		M-CHAT陽性		要フォロー者		M-CHAT陽性のうち要フォロー	
107	9	8.4%	17	15.9%	17	15.9%	27	25.2%	11	64.7%

性別	受診者	M-CHAT 3/23以上		M-CHAT 1/10以上		M-CHAT陽性		要フォロー者		M-CHAT陽性のうち要フォロー	
男	49	7	14.3%	11	22.4%	11	22.4%	20	40.8%	9	81.8%
女	58	2	3.4%	6	10.3%	6	10.3%	7	12.1%	2	33.3%

(4) 県内への普及啓発

松島町で実施してきた M-CHAT の実践を県内の市町村に普及させるため、平成29年12月に市町村職員等を対象とした研修会を実施した。

48人の参加があり、35市町村中23市町村の参加があった。なお不参加市町村にも資料を送付し、周知を図った。

アンケートの回収率は89.6% (43/48) で M-CHAT の導入可能性については、導入可能が41%、導入不可能が59%となった (表4)。

導入可能とした回答では、松島町での取組成果を参考にできること、早期発見・早期支援のために有効であることが理由として挙げられた。一方、導入不可能とした回答では問診、採点に時間がかかること、療育体制が不十分であること、健診項目が増えて保護者負担が増えることが理由として挙げられた。なお、導入不可能とした自治体においても、M-CHAT の有用性に対する理解は示されている。

M-CHAT の導入に伴う健診の際の時間的負担解消に向けては、即時に採点が行える、松島町で使用している独自の早見シートを県内市町村に配付した。

平成29年度発達障害者支援体制整備事業地域支援体制サポート研修会

「発達障害早期発見・支援のためのアセスメント」

日時 平成29年12月20日 (水)

午後1時30分から午後4時まで

会場 宮城県庁行政庁舎2階 講堂

参加者 48人 (市町村職員35人, 県職員12人, その他1人)

内容

○基調講演「乳幼児健診と発達障害」

東北文化学園大学医療福祉学部 教授 藤原 加奈江氏

○研修1「乳幼児健診を通じた親子支援」

宮城県保健福祉部子育て支援課 技術主幹 中嶋 亜希子

○研修2「1歳6か月健診における M-CHAT の導入について」

宮城県保健福祉部障害福祉課 主任主査 川越 聡一郎

○研修3「母子保健の視点での取組について～M-CHAT を導入した健診の状況とその後のフォロー～」

松島町健康長寿課 主査 (保健師) 渡邊 恵美氏

表 4 M-CHATの導入可能性に関するアンケート結果

導入可能	やや導入可能	やや導入不可能	導入不可能
2人(6%)	12人(35%)	19人(56%)	1人(3%)

○導入可能・やや導入可能の回答者

<良い点>

- ・無料で行えること、松島をモデルとして既に活用されており、手本にしやすい。ブロック毎に分かれた健診だが、ブロック毎やスタッフの経験による差が出ないのが良い。
- ・可能と思うのは、準備する物や場など、改めて行わなければならないものが少ない。
- ・早期発見、介入のためにもとても有効である。我が自治体でも課題なので…。
- ・よいツールではある。
- ・M-CHATについて、より学びを深めた上で実施できればと思う。1歳6か月健診の段階で気になる児が多いし、保育所等でも把握しており、療育の仕組みづくりが必要だと思う。
- ・M-CHATがあることで、基準があり、誰が見ても平等に利用できそうで、便利だと感じる。
- ・積極的な町もあるため、取り入れてほしい気持ちはある。
- ・M-CHAT自体はものすごく困難なことではないと思う。

<課題>

- ・課題は、関係スタッフのスキル、スクリーニング後のフォローの体制整備。
- ・健診の流れ(時間がかかる)や、フォロー体制をしっかりと整えてからでないとなかなか難しいかなと思う。準備が必要。
- ・導入に当たっては検討会、保護者の協力も必要であるため、時間を要する。
- ・1回あたりの受健者数が多いところは難しそう。
- ・マンパワー、健診の時間、親への負担増などを考えると、検討すべきことが多い(フォローアップ体制など)。
- ・県の支援がなくなったときに不安である。

○導入不可能・やや導入不可能の回答者

<良い点>

- ・早期発見の大切さは十分に理解できた。
- ・経験が少ない職員にとっては有用なツールである。

<課題>

- ・M-CHATを利用するに当たり、問診、採点に時間がかかり、導入することが難しいと思われる。
- ・まだまだ療育体制は不十分である。M-CHAT、早期発見と療育体制、フォローの場の両輪があつてのものである。
- ・規模が大きい市町村だと、意思統一に時間がかかる。スタッフの確保も課題で、フォロー体制が今はない。色々なことをあわせて考える必要がある。
- ・問診票+健やか親子+M-CHATとなり、保護者負担が増える。問診票の精査から検討が必要。
- ・健診医の考えもあり、すぐには難しいと思われる。

## 1歳6か月児健診にM-CHATを導入して

松島町健康長寿課 健康づくり班 保健師 渡邊 恵美

松島町では、平成13年度の子育て支援センターの立ち上げと同時に「気になる子」への相談事業が開始され、今回の発達障害児者支援モデル事業マネージャーである臨床心理士の藤原加奈江先生にご指導をいただいていた。その事業の中で、1歳6か月児健診と2歳6か月児健診において、各健診問診票に加え、統制障害シートを活用し、保護者の困り感がどこにあるのかを確認できるよう実施してきた。

今回のモデル事業では、1歳6か月児健診において、自閉スペクトラム症の検知度が優れているM-CHATを導入することとなった。平成28年度はアセスメント検討会を3回実施し、1歳6か月児健診で活用していた統制障害シートとの検討を重ね、また、保健師等のM-CHATの勉強会を行い、平成28年12月から1歳6か月児健診で開始する事となった。

健診の流れは、①受付（保護者から問診票を回収）→②身体計測（受診者が身体計測を行っている間にM-CHAT採点担当者が専用のシートを使用しながら、チェック項目をマーキング、採点する）→③保健師問診（採点した問診票を、保健師が受け取り、1歳6か月児の問診票とM-CHAT結果を踏まえながら問診を実施する。）：M-CHATの項目にチェックがある場合は、保護者から状況を確認→④栄養士問診→⑤保育士との遊びと子育て支援センターの紹介（子育て支援センター保育士が実施。集団活動の母子の行動観察も実施）→⑥内科・歯科診察→⑦個別相談→⑧終了となっている。なお、1歳6か月児健診でのM-CHAT実施は、平成28年度2回、平成29年度6回行った。

実施した保健師の感想としては以下の7点である。

- ①M-CHATの点数を確認しながら問診ができるので、より効果的に母子の観察ができた。
- ②M-CHATの点数だけでは、子どもの全体像とかけ離れる場合もあるので、他の問診項目や母子関係、健診場面での行動観察等のポイントから総合的に判断する必要があると感じた。
- ③M-CHATは基準がはっきりしているので保健師の経験年数を問わず、自閉症を確認するツールとしてはとても有効で使いやすいと感じた。
- ④スクリーニングの精度が上がったと感じる。
- ⑤保護者のセルフチェックなので、チェックがある場合は保護者の困り感に寄り添え、次のステップへのつなぎ易さがある。逆に保護者が気づいていない、気づいていてもチェックがない場合は次につなげにくい。
- ⑥M-CHAT実施にあたって、健診の流れが滞らないよう採点者が必要。
- ⑦保健師が疑問、確認したい事項がある場合に対応者がいる事。また、フォロー体制があると心強い。

今回のモデル事業を実施して、3本柱の1つである“1歳6か月児健診における早期発見”から、“個別発達相談（子育てひろば）”へ、そこから現任の保育士、幼稚園教諭の学びの場である“のびっこクラブ”へ、さらに保育所、幼稚園での“巡回心理発達相談”へと流れができ、より連携を強化して次の支援へつなげることができるようになった。

早期から親が子どもの特性に気づき、親の困り感に寄り添いながら、またそれぞれの立場で対象児の特性を理解して切れ目のない支援を行うことで、二次障害の予防につながるように、点から線、線から面、面から立体になるように今後も支援、しくみを継続していきたいと感じている。

## 2 現任者スキルアップ研修及び保育等現場へのフィードバック支援

### (1) のびっこクラブ

#### イ 座学及び自立課題づくり

現任者スキルアップ研修の座学については、「あなたがつくる支援プラン 困った行動が教えてくれる自閉スペクトラム症の支援，藤原加奈江，診断と治療社，2009」を参考に自閉スペクトラム症の特徴や支援のヒント，自閉症の世界について理解を深めた。（表5）

表5 座学の内容（3回実施：平成29年6月～8月 94人参加）

困難さ	支援のヒント
感覚と知覚	・感覚障害の把握 ・基本は無理をさせず尊重 ・環境整備の支援(カームダウンエリアの整備)
認知	・複雑な情報をシンプルに整理(構造化)
言語・コミュニケーション	・快を感じる対人交流経験の場を提供する(分かる、伝えると便利、楽しい)
記憶	・紙に書いて見せながら話す ・スケジュール活用
注意	・注目しているものをなくす ・気が散らないようにパーティションで区切る
実行機能	・行動の計画，点検，修正を日ごろから意識づけ ・計画を立てる習慣 ・感情のコントロール

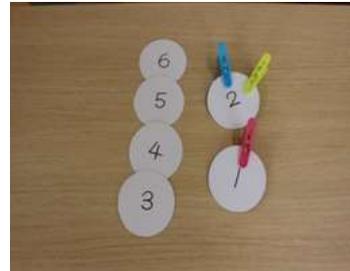
座学と並行して，現任者，スーパーバイザーが集まり，「のびっこクラブ」で取り組む自立課題づくりにも取り組んだ。形や色を合わせるマッチング課題，モデルに合わせて同じものを分けるセット作り，数概念などに取り組んでいる。



マッチング課題



セット作り



数概念

8月から2月にかけて発達のに気になる子の療育教室であり，現任者の療育支援スキルアップのためのOJTでもある「のびっこクラブ」を実施した。主に5歳以上の「Aグループ」と，4歳以下の「Bグループ」の2グループからなる。午前10時30分から開始し，写真や絵カードなどを使って活動の流れを提示しながら，朝のお集まり，中心活動，個別課題，帰りのお集まり，さようならで終わる約30分～50分の療育である。その後，保護者は子育てについて藤原加奈江東北文化学園大学教授（発達障害児者支援モデル事業マネージャー），庄司好美臨床心理士や「のびっこクラブ」保護者担当職員と相談を行い，参加児は子ども担当職員とプレイルームで遊び，正午に終わる。

各グループとも，保育士，幼稚園教諭の現任者が3人，平成28年度の現任者研修修了者の保育士，幼稚園教諭のスーパーバイザーが2人の5人で構成され，藤原教授や庄司臨床心理士がサポートを行った。現任者はスーパーバイザーから助言を受け，支援内容や課題構成などを検討し，支援を行う。また午後には支援内容のカンファレンスを行った。スーパーバイザーは昨年度の経験を活かしながら子どもの見立てや療育課題選択において現任者の支援を行うとともに，「のびっこクラブ」での個別療育を各保育所，幼稚園の取組に活かす役割を担った。

座学及び「のびっこクラブ」による現任者スキルアップを修了した6人の現任者には、平成30年2月に行われた「平成29年度宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業報告会 in 松島」で、発達支援者養成研修基礎講座修了証書が授与された。また「スーパーバイザー研修」を修了した7人のスーパーバイザーには発達支援者養成研修スーパーバイザー講座修了証書が授与された。

## ロ 参加者の感想

2グループ各5回の「のびっこクラブ」の中で、保護者、現任者、スーパーバイザーから出された感想をまとめた。(表6)

### (イ) 保護者

お子さんについては、「慣れない雰囲気落ち着かない様子だった(9月26日:Bグループ第1回)」、「もう少しみんなと一緒に発言があると嬉しい(10月17日:Aグループ第2回)」、「緊張していた(11月21日:Aグループ第3回)」、「場の雰囲気や先生方にも慣れてきて顔を隠したりすることが減った(12月12日:Bグループ第3回)」、「積極的に参加して楽しそうな姿が見られた(1月30日:Bグループ第4回)」、「お勉強って楽しいねと言うようになった(2月5日:Aグループ第5回)」、「早く部屋に入りたくて何度もドアの前に行っていた(2月8日:Bグループ第5回)」と、回を重ねるごとに場の雰囲気や活動に慣れ、楽しく参加する子どもの成長が見られた。

保護者自身については、「他のお母さんの話を聞いて、自分だけじゃないと思った(8月31日:Aグループ第1回)」、「本人が楽しそうにしていたので、安心して見守ることができた(9月26日:Bグループ第1回)」、「少人数の中なら少しやれることもあるようなので安心した(11月7日:Bグループ第2回)」、「言葉で「座って」と言うよりも、椅子を見せて着席を促すことなど少しずつ親としてできてきた気がする(12月12日:Bグループ第3回)」、「本人の成長を楽しみ(1月16日:Aグループ第4回)」、「前よりも怒らなくなっている(1月16日:Aグループ第4回)」、「少しずつ課題に積極的に取り組む姿を見て成長を感じ嬉しく思う(1月30日:Bグループ第4回)」、「わが子なりの成長の仕方があると思えるようになり、少しずつ理解できるようになってきた(2月5日:Aグループ第5回)」と具体的な関わり方を学び、子どもの成長を感じることで、保護者の感情の安定が見られた。

### (ロ) 現任者

現任者は、「一人ひとりに対して、個別に対応できることがとても良い(8月31日:Aグループ第1回)」、「全体での目標、個別での目標をしっかりと設定(8月31日:Aグループ第1回)」、「普段の保育でも活かしたい(9月26日:Bグループ第1回)」、「力加減を実際に手で伝えたことで、言葉よりも伝わると感じた(10月17日:Aグループ第2回)」、「座り方や遊びの自由度を工夫(11月7日:Bグループ第2回)」、「子どもが2人でコミュニケーションをどう活動に入れていくか悩んだが、みんなで話し合いながら決める作業が学びになった(11月21日:Aグループ第3回)」、「(子どもの理解を考えて)スケジュールは次の活動のみ伝えることにした(12月12日:Bグループ第3回)」、「環境構成・ねらい・活動内容が重要だが、予想していない姿に対応する冷静さも必要(1月30日:Bグループ第4回)」、「子ども達にとって、そのままの姿を受け入れてくれる環境がこれほどまでに大切だと改めて感じた(2月5日:Aグループ第5回)」と、集団目標と個別目標の設定、悩んだ際にチームで考える心強さ、十分な準備と予想していない行動に対する対応、ありのままを受け入れる小集団の重要性などの気づきが見られた。

### (ハ) スーパーバイザー

スーパーバイザーは、「支援者の気づきとちょっとした工夫で子ども達の姿が変わる(11月7日:Bグループ第2回)」、「スケジュールの使い方や見せ方など子どもの様子に合わせて使っていかななくてはならない(12月12日:Bグループ第3回)」、「自分自身の評価の基準をしっかりと定めて活動やねらいを考えていく(1月16日:Aグループ第4回)」、「声掛けの数を減らす事で、余計な情報をなくし、伝えたい事に集中してもらえる(2月8日:Bグループ第5回)」と、具体的な支援法や考え方を、観察や情報収集と経験に基づき、現任者に教える役割を担ったことが読み取れる。

表6 保護者、現任者及びスーパーバイザーの感想

			第1回
			8月31日(木)
Aグループ	保護者	お子さんについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>今回の青か黄色、どっちもやりたい、というのを見ていて、わが子らしいと思い、本人の理由を家で聞いてみたい。</li> <li>リラックスしてできたと思うが、返事をしてほしいとか親としての希望は色々あった。</li> <li>楽しく遊べて、友達の中に入れてので一回目としては良かったと思う。</li> </ul>
		御自身について	<ul style="list-style-type: none"> <li>先生の話聞いて、安心した気持ちになり、<u>他のお母さんの話を聞いて、自分だけじゃないと思った。</u></li> <li>幼稚園や集団行動の中でまわりに合わせられるようになると良いと思う。</li> <li>のびっこに参加することにより、他のお友達の事なども少し深く分かることもできるので、色々参考になる。父親にも少しなにか分かってもらえる嬉しい。</li> </ul>
	現任者	参考になったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>実際に子どもが来て、予想できない反応など次回への課題を見つけることができた。一人一人に合った対応をさらにみんなで考えていきたい。</li> <li>和やかな雰囲気だった。<u>一人ひとりに対して、個別に対応できることはとても良いことだと改めて感じた。個人の目標と全体としての目標をきちんと設定することが大切だと思ったので次回に向けて話し合っていきたい。</u></li> <li>実際に子ども達と接してみて、今回立てた計画で良かった点、改善しなければならない点分かり、次回に繋げていきたいと思った。<u>全体での目標、個別での目標をしっかりと設定し、子ども達にとって意義のある時間になるよう工夫していきたいと思った。</u></li> </ul>
	スーパーバイザー	参考になったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>テーマの設定をゆるくしたため、活動があいまいになってしまったが、大きな数、小さい数などを提示するだけで目からの情報で子ども達が納得することができるなど、小さな工夫は参考になった。また保護者の方の困り感と、藤原先生のアドバイスを聞いたことで今後の「のびっこクラブ」の目標設定の参考にしていこうと思う。</li> <li>今日一人一人の子どもの個性を感じることができ、その子に合った支援やこのグループの子ども達ができること・楽しいことを考えられるようにしていきたいと思った。</li> </ul>
			9月26日(火)
Bグループ	保護者	お子さんについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>団体行動をする機会がなかったので、今回のような場を通して他人とのコミュニケーション能力を身につけてほしい。</li> <li>慣れない雰囲気に落ち着かない様子でした。</li> </ul>
		御自身について	<ul style="list-style-type: none"> <li>先生方が子どもの動きに敏感に反応して下さるので親としてどの程度の補助をすれば良いのか不安もあったが、<u>本人が楽しそうにしていたので、後半には安心して見守ることができた。</u></li> </ul>
	現任者	参考になったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>2歳児という年齢の子ども達を保育したことがなく、どのような姿なのか考えながら計画し取り組みました。実際の子どもの姿を見て多くの反省が出た。今後はその反省点を生かして取り組んでいきたい。</li> <li>一人一人の様子を観察する際、どのような視点があるか午後のカンファレンスでの話が参考になった。</li> <li>0,1歳児担任なので活動が楽しくスムーズに過ごせるよう<u>普段の保育でも活かしたい。</u></li> </ul>
	スーパーバイザー	参考になったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>初回ということで環境に慣れなかったり、音に敏感な子どもがいて、対象児に向けてしっかりとかわり、その子を知りながら楽しい教室に作り上げていきたいと強く感じた。</li> <li>一人一人子ども達の様子が違い、戸惑いもあったが、一人一人に合わせた支援方法を考えていく良い機会になった。保育所や幼稚園でも求められるので実践していきたい。</li> </ul>

			第2回
			10月17日(火)
Aグループ	保護者	お子さんについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽しそうにしていた。下の子が見ていたの、なおさら上手にしようとしていたのかなと思った。</li> <li>・やはりまだまだ自分の面白い!と思った事を先にやってしまうところがあるなと思った。「今はこっちを先にやるべき」と分かってくれるといいと思った。</li> <li>・もう少しみんなと一緒に発言があると嬉しいと思った。</li> <li>・他のお子さん達と楽しそうに話していたから良かった。(見ていたから)</li> </ul>
		御自身について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・下の子を連れて初めての参加だったのだが、子どもを見ていてもらえたのでゆったりした気分でわが子を見られた。</li> </ul>
	現任者	参考になったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回の活動の様子を見て、活動を考えていったが、意外な行動も見られ次回への課題にしていきたい。紙芝居など言葉だけでなく力加減を「実際にやってみる」ことの大切さを感じることができた。</li> <li>・<u>力加減を実際に手で伝えたことで、言葉よりも伝わると感じた。</u>人との距離感や言葉の伝え方を、その場、その瞬間に伝えることでインプットされていくのだと感じた。繰り返し伝えていきたいと思う。周りの視線を気にしながら取り組む姿を見て、受け入れる姿勢が大切だと実感した。</li> <li>・今回は紙芝居などを見ながら実践する事で全体活動でも声をかけると自分で気にしようとしている姿が見られて、目で見た物を実際に行ってみるのもわかりやすい一つの方法だということを改めて感じることができた。</li> </ul>
	スーパバイザー	参考になったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・紙芝居を読む時、力の入れ具合を実際に行ってみたところ、子ども達の表情が良くなり次の活動に繋がった。実際に行う大切さを感じた。</li> <li>・それぞれの子ども達が前回より成長している姿が見られていて、その子に合った支援をその時その時でしっかり考えていけるようになりたいと思った。また、個別課題も意欲的に取り組んでいる様子があったので、楽しんでできる工夫を大切にしていきたいと感じた。</li> </ul>
			11月7日(火)
Bグループ	保護者	お子さんについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回ののびっここのことを覚えていたようで、慣れた様子でリラックスして取り組めたようだ。その分、自分の世界に入ってしまう時間もあつた。</li> <li>・初めてで大人の方がたくさんいて緊張していたようだが、風船で遊んだり体操をして気持ちがあほぐれたようだ。少しずつ慣れていければと思う。</li> </ul>
		御自身について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・泣かずに楽しそうに参加していたので、安心して見ていた。集団で取り組む時間にわが子が自分の世界に入ってしまった時は戸惑いもあつたが、先生方と楽しく過ごしている姿も見られて良かったと思う。</li> <li>・動きが多い子なので、一緒にできるか心配だったが、<u>少人数の中なら少しやれることもあるようなので安心した。</u>先生方の声掛けを参考にしていきたい。</li> </ul>
	現任者	参考になったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今回はメンバーチェンジがありお休みの子がいて、前回とは異なる雰囲気だった。その中で一人一人の様子を見たり、先生の動きを考えたりしながら、自分の動きも考えられた。</li> <li>・<u>座り方や遊びの自由度を工夫</u>することで、前回と比べ雰囲気が全く違う空間となり、とても勉強になった。子どもの特徴を改めてつかみ、工夫していきたいと思った。</li> <li>・今回、進行を担当し、前回との雰囲気の違いの中、どのように保育を進めれば子ども達が楽しく参加することができるかなどの目線で考え、取り組むことができた。</li> </ul>
	スーパバイザー	参考になったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今回は子ども達に笑顔が多く、嬉しく感じた。欠席の子も2人いたがクラスにまとまりがあつたと思う。</li> <li>・前回「のびっこクラブ」に参加された子ども達の様子を見て、今回の活動で配慮の点を少し変えて工夫したことで、前回とは違った姿があつたので、<u>支援者の気づきとちょっとした工夫で子ども達の姿が変わる</u>ことが改めて気づかされた。</li> </ul>

			第3回
			11月21日(火)
Aグループ	保護者	お子さんについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>今日は2人だったが、いつもと雰囲気違ったから緊張していたようだった。</li> <li>先生方が多いのとお友達が2人お休みなので緊張している感じがした。なかなか自分自身の意見が言えなかったかなという感じだった。お友達と一緒に取り組もうとしている感じは読み取れた。</li> </ul>
		御自身について	<ul style="list-style-type: none"> <li>私も少しそわそわしてしまった。</li> </ul>
	現任者	参考になったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>今回は子どもが2人だったのでコミュニケーションをどう活動に入れていくべきかとても悩んだが、みんなで話し合いながら決める作業が学びになった。</li> <li>今回は2人の参加ということでいつもよりじっくりと活動に取り組めることができた。活動内容もねらいを意識しながら取り組むことができた。</li> </ul>
	スーパーバイザー	参考になったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>手遊びや椅子の座り方などからその子どもの題点や課題点を分析、それを次回に繋げていくことの大切を実感した。活動を行う際、振り返りを大事にしながらも新しいことを取り入れて、実践に活かると良い。</li> <li>今日の流れを振り返り、前回までの活動と繋げてできていたと感じられるところが多くあり、また初めに立てた目標にも照らし合わせた内容を行うことができたので良かった。スモールステップの取り入れや、自分の気持ちを表すための方法(マークなど)を生かした支援をしていきたい。担任しているクラスでも生かしていきたい。</li> </ul>
			12月12日(火)
Bグループ	保護者	お子さんについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>最初は緊張しているようだった。慣れてくると課題はしっかりできた。グループ分けはできないのかなと思っていたが、それなりにやっていたので意外だった。</li> <li>本日で3回目ということもあり、場の雰囲気や先生方にも慣れてきて顔を隠したりすることが減ったように思う。課題にも少しずつ集中して取り組めるようになってきた。</li> </ul>
		御自身について	<ul style="list-style-type: none"> <li>うろろしたとき言葉で促したり、手をひいたり待ってみたりする加減が迷うところです。やっていくうちに探りたいと思います。</li> <li>言葉で「座って」と言うよりも、椅子を見せたりすることで着席を促すことなど心掛けて少しずつ親としてフォローする方法も変えながらできてきた気がする。</li> </ul>
	現任者	参考になったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>今回は前回とは違い、先生達を一人一人紹介し、スケジュールも次の活動のみ伝えていった。子ども達はよく見ていて、一つ一つを確認しているようであった。次回もよく話し合い、子ども達にとってよりよいものにしていきたい。</li> <li>今回は主担当として活動をメインに行った。事前にしっかりと準備したつもりでも、細かいところで準備や想定の上の忘れがあり、そういう時には子どもにも大きな影響があると思った。準備しすぎるくらいしておいた方が良かったと感じた。</li> </ul>
	スーパーバイザー	参考になったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>3人の子どもの参加し、果物狩りの中心活動を喜んで楽しそうに、じっくりと遊んでくれ、嬉しく感じた。子どもの情報が少ないと予測が難しく、自信を持って活動を設定することが困難であると痛感した。</li> <li>スケジュールの使い方や見せ方など子どもの様子に合わせて使っていかななくてはならないことを改めて知ることができた。どんな手立てにも「目的」をしっかりと持つことが大切だと改めて気づけた。</li> </ul>

		第4回	
		1月16日(火)	
Aグループ	保護者	お子さんについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今日はとても楽しそうだった。</li> <li>・今日もマイペースの自由人でした。先生から「こうしよう」と言われるよりもお友達から「こうだよ」「早くしてね」と言われるほうがハッとすることが分かった。</li> <li>・1回休んだ後ののびっこだったので行く前から恥ずかしいと言っていた。実際に始まってみるとやはり恥ずかしい気持ちもあってか自分の気持ちを出すのが出来なかったのでは？と思った。</li> <li>・お友達と仲良くしようと頑張っていると思う。順番も守ろうとしている。</li> </ul>
		御自身について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽しそうにしているのが分かって良かった。</li> <li>・あと1回ののびっこだが本人の成長を楽しみにしたい。</li> <li>・最近子どもがなかなか言うことを聞いてくれないことが多くなり困っている。</li> <li>・少しずつ手がかからなくなってきたように思い、<u>前よりも怒らなくなっている。</u></li> </ul>
	現任者	参考になったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・補助として、どこまで子どもに声や手をかけて良いのか迷うことが多くあった。</li> <li>・初めて主担当を行い、時間配分の難しさ、活動の運び方などの大変さを改めて感じた。子ども達の反応を想像しながらスケジュールを立てていく大切さを学んだ。</li> </ul>
		スーパーバイザー	参考になったこと
		1月30日(火)	
Bグループ	保護者	お子さんについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初めてのビー玉で楽しんでた。</li> <li>・気持ちが他に移る場面も見られたが、積極的に参加して楽しそうな姿が見られた。</li> <li>・久しぶりの参加だったが、カードを入れたり作業をしたりするところだと覚えていたようだ。車に乗ってガタンとなるのが好きなようで最近ソリで遊んだりしたからかなと思った。色分けの時はシールの色とポンポンの微妙な色の違いを気にしている様子があった。</li> </ul>
		御自身について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・わが子が少しずつ一つの課題に積極的に取り組む姿を見て成長を感じ嬉しく思う。</li> <li>・子どもがどんなことに興味を持って、集中できることはどんなことか知る機会になっていると感じる。</li> </ul>
	現任者	参考になったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ねらいを持ち活動を行い、様々な反応や姿を見ることができた。チームみんなで計画を立て取り組みたい。</li> <li>・今までとまた異なる支援ポイントなども感じた回となった。<u>一人一人の特性に合わせた環境構成・ねらい・活動内容が重要であることはもちろんだが、どういう姿が予想されるか、その姿に対してどうアプローチするかをより明確にすること、予想していない姿に対応する冷静さが必要だと感じた。</u></li> </ul>
	スーパーバイザー	参考になったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが喜んで参加している場面が見られ嬉しく思った。「キラキラしたビー玉が好き」、「冷たい感触が好き」、「大きな声を出してしまうタイミング」など発見が多く、多くかかわることで特性を知っていけることを改めて感じた。</li> <li>・親子で一緒に参加できる遊びや、感覚遊びを取り入れた中心活動など、ねらいを自分の中で明確にして進めた。お子さんの笑顔が見られほっとしたと同時に、発見も多くあったので、今後反映させたい。</li> </ul>

		第5回	
		2月5日(月)	
A グループ	保護者	お子さんについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最後に、昨日からはりきっていた。どんどん楽しそうにしている、<u>お勉強って楽しいね！！なんて言うようになった。</u></li> <li>・今日も全力で「自分」を出していた。本人は楽しんでいるが、ルールを守る事を分かってほしい。</li> <li>・みんなの中にまざると少し恥ずかしい気持ちもあるせいか、他の子と比べると発言が少なかったと思ったが、みんなで道具を出す時は自分なりに動いて手伝っていたと思うので良かった。</li> <li>・自分の気持ちをお友達の前でうまく表現できいのは変わらないが、楽しく遊べている時もあるので成長している。</li> </ul>
		御自身について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私自身、先生のお話を聞いて少しずつ気持ちにゆとりが出てきた。<u>わが子にはわが子の成長の仕方があると思えるようになり、少しずつではありますが理解できるようになってきた。</u></li> <li>・まもなく入学なので、家でも学校でも気にかけていきたい。</li> <li>・最近子どもに何度も同じことを注意しているように感じるが、今は出来なくても先に出来る事が増えればと思うように考えている。</li> </ul>
	現任者	参考になったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1年間、「のびっこクラブ」で過ごしてきた子ども達が、お互いにコミュニケーションをとりながら活動している様子が見られるようになり「良かったな」と思った会だった。</li> <li>・子ども達の成長した姿を見ることができた。<u>子ども達にとって、そのままの姿を受け入れてくれる環境がこれほどまでに大切なことだと改めて感じた。</u>保護者の方も子どもに対してこれからどのように接していけば良いか、安心して相談していたので良かった。</li> <li>・最後の「のびっこクラブ」で今までの反省や改善点を生かした活動に出来た。子ども達からも「ありがとう」と言われ、頑張ってきて良かったと思った。</li> </ul>
		スーパーバイザー	参考になったこと
		2月8日(木)	
B グループ	保護者	お子さんについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まだ少し不安なところもあり、始まってからは母の手を掴んだりしていた。</li> <li>・<u>早く部屋に入りたくて何度もドアの前に行っていた。</u>車はとても楽しんでいた。はらぺこあおむしも好きなので立ち歩かずに見ることができた。</li> </ul>
		御自身について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容がとても良かった。本人も楽しそうだった。</li> <li>・好きなことや興味のある物はやはり集中して取り組めるのだなと思った。今日は少し安心して子どもの様子を見ていられた。</li> </ul>
	現任者	参考になったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今日は人数の少ない中での実施だった。これまでの情報を生かしながら行うことができた。一人一人の特性や好みを知り、それを活用して計画を立てることが大切だと思った。</li> </ul>
		スーパーバイザー	参考になったこと

## ハ 保護者の「のびっこクラブ」参加前後のアンケート調査の分析

2グループ各5回の「のびっこクラブ」に参加した保護者6人（9人の参加があったが、第1回目と第5回目にいずれも参加した保護者以外は分析対象外とした）に事業開始前と、事業終了後にアンケート調査を実施した。アンケートは、「お子さんの発達・発育を理解している」「お子さんの行動について理解している」「お子さんの興味関心を理解している」「お子さんへの関わり方のコツを理解している」「お子さんの成長を促すための関わり方を理解している」「子育てについて自信がある」の6項目について「1 全く当てはまらない、2 少し当てはまらない、3 少し当てはまる、4 かなり当てはまる」の4択で自信の程度を尋ねた。

ウィルコクソンの符号順位検定の結果、「お子さんの成長を促すための関わり方を理解している」の項目において研修前後で有意差があった（ $p<0.05$ ）。「のびっこクラブ」の中で、保育士や幼稚園教諭が子どもに関わる様子を見て実際に子どもの成長を実感することで、成長の促し方の理解が深まったと考えられる。（表7）

表7 保護者アンケート結果（平均値）

	発達理解	行動理解	興味理解	関わり理解	成長促し	子育て自信
事業開始前	3.3	3.1	3.3	2.8	2.5	2.1
事業終了後	3.3	3.3	3.6	3.1	3.3*	2.5

さらに保護者にはPOMS短縮版も実施した。POMSは「緊張」、「抑うつ」、「怒り」、「活気」、「疲労」、「混乱」の6つの尺度から気分や感情の状態を測定する心理検査である。

T検定の結果、疲労のみ有意差があった（ $p<0.05$ ）。「のびっこクラブ」に参加し、子どもが活動に楽しく参加する様子を見ること、親同士で支援者も入れた話し合いの場を持つことが、疲労感の軽減に繋がったと考えられる。（表8参照）

表8 POMS保護者結果（Tスコア平均値）

	緊張	抑うつ	怒り	活気	疲労	混乱
事業開始前	43.3	47.3	46.3	48.0	46.3	49.0
事業終了後	40.2	41.3	44.0	50.0	41.7*	47.5

## ニ 現任者の「のびっこクラブ」参加前後のアンケート調査の分析

2グループ各5回の「のびっこクラブ」に参加した現任者（保育士、幼稚園教諭）6人に事業開始前と、事業終了後にアンケート調査を実施した。アンケートは、「発達支援に関する知識」「発達支援に関するアセスメントスキル」「療育課題に関する工夫」「一人一人に応じた支援への配慮（環境調整）」「家族の思いへの理解」の5項目について、「1 全く自信がない、2 少し自信がない、3 少し自信がある、4 かなり自信がある」の4択で自信の程度を尋ねた。

ウィルコクソンの符号順位検定の結果、「療育課題に関する工夫」と「一人一人に応じた支援への配慮（環境調整）」の項目において研修前後で有意差があった（ $p<0.05$ ）。療育場面を通して具体的に繰り返し取り組んだ活動についての自信が増している様子が窺えるのは、昨年度現任者に行ったアンケート調査と同様の傾向が見られた。（表9参照）

表9 現任者アンケート結果（平均値）

	発達知識	アセスメントスキル	療育工夫	環境調整	家族思い理解
事業開始前	1.7	1.5	1.5	1.5	1.8
事業終了後	2.2	2.0	2.5*	2.3*	2.3

## ホ スーパーバイザーの「のびっこクラブ」参加前後のアンケート調査の分析

2グループ各5回の「のびっこクラブ」に参加したスーパーバイザー（保育士，幼稚園教諭）4人に事業開始前と，事業終了後にアンケート調査を実施した。アンケートは，「二期生（現任者）の質の高い援助に向けた環境整備」「二期生への知識等の伝達及び実践への結び付け」「二期生の悩み不安の受け止めと役割の明確化」「発達支援に関する知識」「発達支援に関するアセスメントスキル」「療育課題等における具体的な工夫」「子ども1人1人に応じた支援への配慮」「家族の思いへの理解」の8項目について，「1 全く自信がない，2 少し自信がない，3 少し自信がある，4 かなり自信がある」の4択で自信の程度を尋ねた。

ウィルコクソンの符号順位検定の結果，総じて有意な差は見られなかったが，「療育課題等における具体的な工夫」と「子ども1人1人に応じた支援への配慮」で有意傾向が見られた（ $p<0.1$ ）。

現任者でも同様の傾向が見られたが，現任者と比べると有意差としては小さい。これは現任者への技術伝達における熱意の高まりと葛藤によるものと思われる。（表10参照）

表10 スーパーバイザーアンケート結果（平均値）

	環境整備 (対二期生)	知識と実践 結びつけ (対二期生)	悩みと役割 の明確化 (対二期生)	発達支援 知識	アセスメント スキル	療育課題の 工夫	個別支援 配慮	家族理解
事業開始前	2.5	2.3	2.3	2.0	2.0	2.0	2.0	2.3
事業終了後	2.5	2.5	2.8	2.3	2.5	2.8 <sup>+</sup>	3.0 <sup>+</sup>	2.8

## (2) のびっこクラブフォローアップ教室

### イ 保護者の感想

昨年度実施した「のびっこクラブ」に参加した保護者から継続支援のニーズがあったため、表11のとおり計3回の「フォローアップ教室」を実施した。昨年度の6人の参加保護者のうち4人が参加した。フォローアップ教室では、保護者の他、ペアレント・メンター養成研修を修了した先輩保護者、保育士等の支援職員、藤原加奈江東北文化学園大学教授が入って、子どもの家庭での様子や親の関わり、心配していることなどを参加者で共有しながら、メンターが随時体験談を話すという流れで実施した。

表11 のびっこクラブフォローアップ教室について

	日時	内容	参加者
第1回	平成29年8月1日(火) 午前10時～午後0時	1 家庭での様子や関わり	保護者4人 メンター1人 支援職員2人
第2回	平成29年11月7日(火) 午前10時～午後0時	2 心配なこと	保護者4人 メンター1人 支援職員2人
第3回	平成30年1月23日(火) 午前10時～午後0時	3 メンターからの体験談	保護者3人 メンター1人 支援職員2人

各回に参加した保護者から出された感想をまとめた。(表12参照)

保護者からは「他のお子さんの事を聞き、共感しストレス発散できた(8月1日:第1回)」、「3か月ごとにはちょうど良い頻度である(1月23日:第3回)」、「話すことでストレスが軽くなり、次への成長や対応も分かり、実践したい(1月23日:第3回)」と、話すことや聞くことで学び、不安感を解消している様子が窺えた。

表12 のびっこクラブフォローアップ教室の保護者の毎回アンケート結果

第1回	
8月1日(火)	
感想	<ul style="list-style-type: none"> <li>・色々話を聞いていただいたり、<u>他のお子さんの事を聞いてみたり</u>、共感することでストレスも発散できた。</li> <li>・昨年ののびっこ以降の子どもの色々な事を話せ、他の人達の悩みなども聞けて共感できてよかった。</li> <li>・前回最終ののびっこから成長を含め、聞きたい事をためていたの、解消できてよかった。</li> <li>・参加してとても勉強になった。</li> </ul>
良かった点 や改善点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・皆さんと色々な事を話すことができて良かった。</li> <li>・色々な情報が聞けて良かった。</li> </ul>

第2回	
11月7日(火)	
感想	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他のお母さん達の話聞いて共感したり、今悩んでいる子どものことを相談しながら、参考になる言葉が聞けて良かった。</li> <li>・切り替えについて話が聞けて勉強になった。</li> <li>・また聞きたいことを解決できて良かった。</li> </ul>
良かった点 や改善点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フォローアップ教室と幼稚園行事の連携が取れると良い。</li> <li>・スマートフォン、ゲーム、TVなどの使用について、もっと話したい。みんな共通の悩みがあるようだったので。</li> </ul>

第3回	
1月23日(火)	
感想	<ul style="list-style-type: none"> <li>・成長するにつれて今までできなかったことができてきた分、新たな問題が出たりして、日々様々なことを学んでいる。</li> <li>・見通しがある対応で切り替えがスムーズになってもらえたらと思う。</li> <li>・前回からの成長に気付かせてもらえた。<u>3か月ごと初めは足りないと思っていたが、ちょうど良いのかもしれない。</u></li> </ul>
良かった点 や改善点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・できたことを褒めたりしているつもりだが、子どもにとってどうなのか考える日々である。</li> <li>・子どもが興味を持っていることをさせて笑顔で対応できればと思う。</li> <li>・話すことでストレスが軽くなり、<u>次への成長や対応も分かり、実践したい。</u></li> </ul>

また、保護者に対して、各回に参加した満足度について「1 とても満足、2 やや満足、3 やや不満、4 とても不満」の4択で尋ねた結果、いずれも満足度が高かった(表13参照)。

表13 のびっこクラブフォローアップ教室への満足度

	とても満足	やや満足	やや不満	とても不満
1回	4人			
2回	1人	3人		
3回	3人			

## ロ 保護者の「のびっこクラブフォローアップ教室」参加前後のアンケート調査の分析

3回の「のびっこクラブフォローアップ教室」に参加した保護者3人（4人の参加があったが、第1回目と第3回目にいずれも参加している対象者以外は分析対象外とした）に事業開始前と、事業終了後にアンケート調査を実施した。アンケートは、「お子さんの発達・発育を理解している」「お子さんの行動について理解している」「お子さんの興味関心を理解している」「お子さんへの関わり方のコツを理解している」「お子さんの成長を促すための関わり方を理解している」「子育てについて自信がある」の6項目について「1 全く当てはまらない、2 少し当てはまらない、3 少し当てはまる、4 かなり当てはまる」の4択で自信の程度を尋ねた。

ウィルコクソンの符号順位検定の結果、分析対象者の少なかったためか、有意差は見られなかった。（表14参照）

表14 保護者アンケート結果（平均値）

	発達理解	行動理解	興味理解	関わり理解	成長促し	子育て自信
事業開始前	3.0	3.0	3.3	3.0	2.3	2.0
事業終了後	3.3	3.3	3.7	3.3	3.0	2.0

さらに保護者にはPOMS短縮版も実施した。T検定の結果、有意差はなかった。同じく分析対象者の少なさが原因と考えられる。（表15参照）

表15 POMS保護者結果（Tスコア平均値）

	緊張	抑うつ	怒り	活気	疲労	混乱
事業開始前	43.3	44.5	49.3	43.5	46.5	46.5
事業終了後	43.3	41.7	46.7	46.0	40.0	50.0

### (3) スーパーバイザー研修

#### イ スーパーバイザーの感想

平成28年度の現任者スキルアップ研修（基礎講座）修了者7人は、平成29年度モデル事業において①「のびっこクラブ」での療育において現任者をサポートすること、②「のびっこクラブ」での療育を保育所・幼稚園での支援と連動させ、町全体の支援の平準化を図ることを目的に、スーパーバイザーとして配置された。これにより、発達支援において地域の支援者が次の支援者を育てるという持続可能な仕組みづくりに取り組んだ。

スーパーバイザー7人には、3回のスーパーバイザー研修を実施した。（表16参照）また、この研修とは別に、巡回支援専門員が各保育所、幼稚園を訪ねた際に、スーパーバイザーが支援している施設内のお子さんについて、スーパーバイザーのアセスメントと支援内容に基づいて事例検討を実施し、現場支援との連動を図っている。

表16 スーパーバイザー研修について

	日時	内容	参加者
第1回	平成29年9月12日（火） 午後3時～午後5時	1 スーパーバイザーの役割について 2 支援シートの記入法	スーパーバイザー7人
第2回	平成29年11月7日（火） 午後3時～午後5時	1 記入した支援シート、情報シートの共有 2 目標達成のための支援方法	スーパーバイザー7人
第3回	平成30年1月23日（火） 午後2時～午後5時	1 スーパーバイザーとしての取組の共有 2 その他	スーパーバイザー5人

各回に参加したスーパーバイザーから出された感想をまとめた。（表17参照）

スーパーバイザーからは「具体的な場面を捉え細かく観察し、記入するには、子どもの理解が一番土台にあると実感（8月1日：第1回）」、「情報シートを書き、分かっているようで色々と分かっていなかったことを感じた（11月7日：第2回）」、「目標をより具体的に記すことで支援方法が自分で考えやすくなる（11月7日：第2回）」、「松島町に発達支援の意識が広まってきている（1月23日：第3回）」、「のびっこで学んだことがしっかり活かされていると確認できた（1月23日：第3回）」等の記載があり、最初はスーパーバイザーとして不安を感じていたが、シートへの記載を通して詳細な観察や具体的な目標の記述、職員間の共有の意識が芽生え、「のびっこクラブ」での支援実践が現場での支援に活かされているとの気付きに繋がっている。

表17 スーパーバイザー研修のスーパーバイザーの毎回アンケート結果

<p>1 回目 平成 29年 9月 12日</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スーパーバイザーとしてスキルアップをするために<u>具体的な場面を捉えて、子どもの様子を細かく観察し、記入していくこと、それは子どもの理解が一番土台にあることだと実感した。</u>担任していないことで、どのくらい理解、分析ができるか不安もありますが、頑張っていこうと思う。</li> <li>・スーパーバイザーとして支援者と支援していく立場となったので、その難しさを強く感じていますが本事業を通して自分自身も成長していきたい。支援シートを通して子ども理解を深め、他の職員と情報を共有し複数の目と手で支援していきたい。</li> <li>・実際に対象児のことをより深く知る機会になると思う。スーパーバイザー研修で姿を追いかける子が、「のびっこクラブ」に通う子でもあるのでよりよい支援に繋がるよう頑張りたい。</li> <li>・今回取り組んでみて自分がどんなことをしたらいいのかまた現場でどんな支援体制を作っていくのか子どもにとって良いのか、分かりやすくなるよう頑張りたい。</li> <li>・ステップシート、情報シートは何度記入しても勉強になるが、本日再度確認し記入の仕方が詳しく理解できた部分があった。決められたことを指示に従って行いう事が見えてくること、それが将来へ繋がって見えていく可能性に繋がることを学べた。</li> <li>・ステップシート、情報シートの記入(改めてそうだったという気づき)そしてどのように計画してどのようにその子の困り感を捉え、やる気、スキル、環境整備をしていくのか、ということで私自身のクラスにいるお子さんのことを考えながら、先生のお話を聞くことができて良かった。実際に支援の先生と情報シートを書いてみて実践していきたい。</li> <li>・シートの書き方を再確認した。担任ではなく子どもと関わることは今までと違い十分に理解できないと感じることもあるが、その子が何につまずいているのかをよく知るためには、シートに基づいた分析が必要で、自分がかかわり支援していることを振り返る良い機会だと感じた。</li> </ul>
<p>2 回目 平成 29年 11月 7日</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分では気づけていなかったところが、<u>情報シートを書いてみて分かっているようで色々分かっていたことを感じた。</u>また自分だけで考えるのではなくみんなで共有できるようになることが支援の共通化にとっても役立つように思えた。子どものイメージをつかめるような記入の仕方ができるようになりたい。</li> <li>・ステップシートや支援シートを書いてみて、自分のクラスではない補助的な立場でスーパーバイズすることはとても難しいと感じた。お互いの事例を聞くことができて勉強になった。(目標は具体的に3ヶ月くらいで達成できそうなものを書くことが改めて勉強になった)</li> <li>・自分の記載と他の先生の記載を比べ、7つのステップシートの中で欠けていたことから、その子の理解が深められていなかったことに気づけました。次に書いてみようと思った。さらに自分の心理状態で感情をみていたことも気づけました。他の先生方の話を聞くことで更に色々な子どもの支援の仕方やその子の捉え方を学べた。</li> <li>・理解しているつもりでも、できていないことがたくさんあると実感した。支援シートの目標設定では短期間で70~80%くらいできることを記入する、そして具体的にという言葉が響き、早速直してみたい。</li> <li>・自分のクラスではないお子さんの支援を担当の先生と一緒に考えアドバイスをしていく事の難しさをとても感じている。先生からいただいた話を参考にしつつ、担任の先生としっかり話し合いながら支援の方法を見つけていきたい。</li> <li>・今回スーパーバイザー研修に参加させて頂き、各先生方が各園で頑張っている状況も聞くことができ、かつ藤原先生からのアドバイスも多く聞くことができたので参考になった。</li> <li>・それぞれの情報シートや支援シートを確認しながら藤原先生のアドバイスを頂いたが、<u>目標をより具体的に記すことで支援方法が自分で考えやすくなる</u>と感じ、改めて色々な角度からアプローチしていくように立て直し進めたい。子どもの行動の捉え方、考え方一つで支援方法も全く変わっていくと実感した。</li> </ul>
<p>3 回目 平成 30年 1月 23日</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一期生の先生方のスーパーバイザーとしての報告を聞くことができ、各園で頼もしく頑張っている様子が印象的だった。<u>松島町に発達支援の意識が広まってきている</u>ことを感じ嬉しかった。</li> <li>・他の先生方がどのようなお子さんや職員に対して支援を行ってきたのか、話を聞かせていただいたのでとても参考になった。先生方が実践している事を自分も日常の保育に取り入れていきたい。</li> <li>・昨年度「のびっこクラブ」で経験させて頂いたことを自分が日々の保育の中でいかに生かすことができたが、先生方とどう連携をとってやっていたか、家庭との繋がりはどうだったかについても振り返ることができ、今後自分が支援にどうかかわっていくのが良いか考えることができた。</li> <li>・他の先生方の話を聞けたことがとても良かった。自分では気付かなかったこと、例えば保護者のこと、スーパーバイザーとしての役割的なこと。(今年度は自分のことではいっぱいだったのでこの先活かせるようになりたい)</li> <li>・スーパーバイザーとしての立場で色々な思いや悩み等を聞きながらその思いに共感することが多々あった。日々の保育の中で、<u>のびっこで学んだことがしっかりと生かされていると確認できたこと</u>でまた次のステップになると感じた。</li> </ul>

## ロ スーパーバイザーのスーパーバイザー研修参加前後のアンケート調査の分析

3回の「スーパーバイザー研修」に参加したスーパーバイザー7人（7人の参加があったが、第1回目と第3回目にいずれも参加した対象者以外は分析対象外とした）に事業開始前と、事業終了後にアンケート調査を実施した。アンケートは、「現任者研修の学びを現場の実践に取り入れること」「若手職員に対する発達支援に関する指導や助言」「スーパーバイザーとしての自己研鑽」「理論や実践の説明」の4項目について「1 全く自信がない、2 少し自信がない、3 少し自信がある、4 かなり自信がある」の4択で自信の程度を尋ねた。

ウィルコクソンの符号順位検定の結果、有意差はなく、「理論や実践の説明」で有意傾向が見られた ( $p<0.1$ )。「のびっこクラブ」や保育所、幼稚園の支援現場において、スーパーバイザーとして現任者や若手職員と情報共有することを意識したことで理論や実践の説明に関してはやや自信が増す傾向があったと考えられる。(表18参照)

表18 スーパーバイザーアンケート結果（平均値）

	療育と現場の連動	若手指導	自己研鑽	理論実践説明
事業開始前	2.5	2.1	2.0	1.8
事業終了後	2.5	2.3	2.3	2.0 <sup>+</sup>

#### (4) その他

##### イ 市町村体制強化研修

県内市町村における発達障害児者に対する早期支援体制の整備促進・強化を図るため、市町村職員及び保育士、幼稚園教諭等を対象とする市町村体制強化研修を実施した。市町村からの依頼に基づき松島町で実施している支援ノウハウや成果を伝達する「早期支援体制整備出前講座」と松島町外の保育士及び幼稚園教諭に現任者スキルアップ研修に参加していただく「現任者スキルアップ研修体験講座」の2つからなっている。

「早期支援体制整備出前講座」については、応募がなかった。周知不足とともに、他領域に渡る支援と連携が求められる発達支援というテーマと、市町村からの依頼というハードルの高さが原因であると思われる。

一方、「現任者スキルアップ研修体験講座」には、10回の「のびっこクラブ」のうち、6回、6人の保育士、幼稚園教諭に参加いただいた（仙台圏域、東部圏域）。

体験講座に参加した保育士、幼稚園教諭から出された感想をまとめた。（表19参照）

参加者からは「集団を見据えた活動の組み立て方や言葉掛けの仕方、掘り下げ方など参考になった」、「子どもの様子を把握し、その子に合ったやり方、環境づくりの大切さを改めて学んだ」、「全員が共有できることを考慮し計画立案し活動を行っている」と、集団と個別、環境整備など、「のびっこクラブ」で特に注力している部分についての気づきが見てとれる。

表19 体験講座の参加保育士等アンケート結果

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・<u>集団を見据えた活動の組み立て方や言葉掛けの仕方、掘り下げ方などとても参考になった。</u></li><li>・発達のお子さんに関わることがなかったので対応の仕方などとても参考になった。一人一人対応の仕方が違いみんなで一緒に活動することの難しさを感じた。その子に合った援助の仕方を考えていくことが大切だと思い、とても良い体験になった。</li><li>・先生方の細かい所への配慮がとても勉強になった。また、<u>子どもの様子を把握し、その子に合ったやり方、環境づくりの大切さを改めて学んだ。</u>今後の保育で活かしていきたい。</li><li>・早期支援体制整備のためのノウハウを知る機会と今後の自分の園での支援体制整備に対する方法を考える機会となった。松島町では「のびっこクラブ」をすすめる職員が、保育所、幼稚園の職員であるため、来園する際に見知った先生がいることになる。臨床心理士の先生方と膝詰めで話し合いができる体制が整っていることも素晴らしい。</li><li>・個々の行動をよく観察し、個々に合った指導方法を考え、さらに<u>全員が共有できることを考慮し計画立案し活動を行っている</u>ことが、とても勉強になった。手作りの個別課題も工夫されていて今後参考にさせて頂きたい。</li><li>・取り組んでいる保育士さん達が、意欲的に、積極的に学ぼうとする姿勢が感じられ、町全体、全施設で取り組むことの意義、伝えることの大切さ、手法を参考にしていきたい。</li></ul> |
|---|

## ロ 保育所長・幼稚園長・児童館長アンケート調査結果

事業終了後に保育所、幼稚園、児童館の管理者に郵送によるアンケート調査を実施した（7人送付。回答率100%）。

アンケートは、「のびっこクラブ」に参加した職員（現任者）について「発達支援に関する知識」「発達支援におけるアセスメントスキル」「療育課題等における具体的な工夫」「1人1人に応じた支援への配慮（環境調整）」「家族の思いへの理解」の5項目について「1 全く深まらなかった、2 あまり深まらなかった、3 少し深まった、4 かなり深まった」の4択で管理者の目から見た深まりの程度を尋ねた。（表20参照）

その結果、いずれの項目も概ね深まりが認められている。現任者自身は療育工夫や環境調整でより自信が増していたが、管理者からはアセスメントスキルや発達知識においてより深まりを感じる結果となっている。

表20 管理者アンケート結果（管理者の目から見た参加職員（現任者）の深まり）

問い	全く深まらなかった	あまり深まらなかった	少し深まった	かなり深まった
発達知識		1人	1人	5人
アセスメントスキル		1人		6人
療育工夫		1人	3人	3人
環境調整	1人		2人	4人
家族理解			3人	4人

また、「のびっこクラブ」での療育を保育所・幼稚園での支援と連動させるためスーパーバイザーについて「療育場面と現場の連動」「発達支援に関する若手指導」「スーパーバイザーの自己研鑽」「1人1人に応じた支援への配慮（環境調整）」の4項目について「1 全く深まらなかった、2 あまり深まらなかった、3 少し深まった、4 かなり深まった」の4択で管理者の目から見た深まりの程度を尋ねた（表21参照）。

その結果、いずれの項目も深まりを認めており、現任者よりもスーパーバイザーに対してより評価が高い。特に療育と現場の連動や自己研鑽の深まりが強いことを考えると、スーパーバイザーが2年間学び、その学びを支援現場に活かしてきたことを、管理者が高く評価し、スーパーバイザーの自己評価以上に深まりを感じていると考えられる。

表21 管理者アンケート結果（管理者の目から見た参加職員（スーパーバイザー）の深まり）

問い	全く深まらなかった	あまり深まらなかった	少し深まった	かなり深まった
療育と現場の連動			1人	4人
若手への指導			2人	3人
自己研鑽			1人	4人
環境調整			2人	3人

また、事業において代替職員が配置されたことについて「代替職員の配置」、「代替職員の勤務状況」、「代替職員と職員の連携」の3項目について「1 全く良くない、2 少し良くない、3 やや良い、4 非常に良い」の4択で尋ねたところ、いずれも非常に良いと高い評価が認められた（表22参照）。

表 2 2 代替職員が配置されたことについて

問い	全く良くない	少し良くない	やや良い	非常に良い
代替職員配置				7人
代替職員勤務状況				7人
職員間の連携				7人

「事業において、代替職員が配置されたことについての御見解をお書きください。」「のびっこクラブでの学びが貴保育所・幼稚園・児童館における実践において活用された例がありましたらお書きください。」「本事業を通して貴保育所・幼稚園・児童館において見られた変化はありましたか?」「この事業についての感想をお書きください。」の4点についても自由記載によるアンケート調査を実施した。(表 2 3 参照)

代替職員の配置については、「保育現場に支障をきたすことを回避できた」、「同じ保育士だったので、職員も子ども達も安心していた」等の意見があり、「のびっこクラブ」での現任者の学びを保障する上で、支援現場に代替職員が配置されることが支援の安心に繋がっている。

実践における活用例としては、「一日の流れのスケジュールを保育者と作り生活に取り入れること」、「所内での気になる姿や気になる場面が見られた時に、クラスを問わずスーパーバイザーが関わってくれる」等の意見があり、スケジュールや構造化など具体的な支援実践への適用やスーパーバイザーが支援において大きな役割を担っていることが読み取れる。

保育所等での変化としては、「園全体で発達障害児への対応を前向きに取り組むことができるようになった」、「現任研修でのスキルアップが個々の自信に繋がり、スーパーバイザーからの支援も心強い」、「発達障害における理解、認知度はとても上がった」等の意見があり、現任者やスーパーバイザーが自信を持ち役割を意識し、施設全体として発達支援スキルの向上が見られている。

感想としては、「今回の事業は子ども・保護者・町にとって画期的なものだった」、「のびっこクラブに参加した職員・松島の子育て事業にとって、「支援」に対しての大きな学びとなった」、「のびっこクラブで学んだ保育士が増えることで確実に支援の幅は広がっている」等の意見があり、2年間の松島町での取組により発達支援が定着し、質の向上に寄与していると考えられる。

表 2 3 管理者アンケート調査結果（自由記載等）

問い	回答
<p>代替職員配置への御見解</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・職員が「のびっこクラブ」に参加する時は園長が補助としてクラスにはいていたが、代替職員がいることで安心して参加できることはとても良い。</li> <li>・代替職員の配置により、<u>保育現場に支障をきたすことを回避できた。</u>OBが代替職員で現場での雰囲気も良好だった。</li> <li>・本園では常勤の臨時職員が代替職員に当たったことで問題なく過ごせた。</li> <li>・昨年と同じ保育士だったので、職員も子ども達も安心していた。職員がのびっこに専念できる環境になり良かった。</li> <li>・今の保育所の職員の人数を考えると、代替職員の配置はとてありがたい。来て下さる先生も笑顔で子ども達と関わって頂きとても助かっている。またのびっこに行く職員も出かけやすさがあると思う。</li> <li>・毎回同じ代替職員だったので、年齢の低い子ども達も人見知りすることがなく、良かった。</li> <li>・代替職員が同じ幼稚園・保育所に配置されたことでお互いに働きやすい環境だった。</li> </ul>
<p>実践における活用例</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育室の構造化をすることで、支援児が指示がなくてもクラスでの活動に参加できる。<u>一日の流れのスケジュールを保育者と作り生活に取り入れ、自分でスケジュールを見て活動をしている。</u></li> <li>・発達障害への理解と知識が深まり、具体的な支援方法を知ることで保育者が以前よりも積極的に子どもへの支援に取り組んでいる姿が見てとれた。グレーゾーンの子も達が増え、現場ではその対応に苦慮している。集団活動や切り替えの苦手な子どもに対して自立課題や1日の流れをわかりやすく提示し、クラスの中で支援を必要とする子どもに対して「のびっこクラブ」で学んだスキルを取り入れながら同僚やスーパーバイザーのアドバイスを受けいろいろな支援の仕方を模索し、頑張る姿があった。</li> <li>・スケジュール表示の仕方の改善等</li> <li>・今までシートを記入したことのない保育士がシートを書き入れて子どもの特性を知ることに役に立った。</li> <li>・<u>所内での気になる姿や気になる場面が見られた時に、クラスを問わずスーパーバイザーが関わってくれていた</u>ので、他の職員もスーパーバイザーの動き、環境構成等、実際に見て学ぶ機会が多かった。</li> </ul>
<p>保育所等での変化</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各クラスに支援を要する園児がいることで担任と特別支援員が密に相談をして支援内容を考える姿が多くなった。</li> <li>・<u>園全体で発達障害児への対応を前向きに取り組むことができるようになった</u>と感じる。現任研修でのスキルアップが個々の自信に繋がり、スーパーバイザーからの支援も心強い。発達支援への理解がより深まっている。</li> <li>・<u>発達障害における理解、認知度はとても上がった。</u>保育士にも保育補助にも理解しようとする姿勢が見られた。</li> <li>・去年、のびっこで学んだ職員はやはり大きな自信につながり、スーパーバイザーとして、意識を持って働きかけてくれている。学んだことを日々の保育の中で実践することで、子どもや職員、また保育所の成長にもつながっている。</li> <li>・切り替えが難しい子への対応がスムーズになってきた。</li> <li>・手作りの自立課題は児童館（子育て支援センター）に保管してあり、園で使いたい時に持ち出して使えるようになっている。子育て支援センターの事業においても、幼児教室に構造化を取り入れている。</li> </ul>
<p>感想</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「のびっこクラブ」に参加した幼児は確実に伸びてクラスの活動にしっかり参加できるようになり保護者も安心して居る。また、「のびっこクラブ」に参加したことで実践・反省・実践を経験し、若い保育者のスキルアップになった。</li> <li>・発達障害児（グレーゾーンも含めて）が増えているなかで、<u>今回の事業は子ども・保護者・町にとって画期的なものだった。</u>今後も保育者が現任者研修の学びを活かし、各機関や行政と連携を図りながら継続していくことを願う。</li> <li>・「のびっこクラブ」に参加した職員・松島の子育て事業にとって、「支援」に対しての大きな学びとなったと思われ、大変感謝している。昨年もそうだったが、通常の保育の準備等には若干の支障がある。園運営のため、他の職員もサポートしている。今後、学んだ者を中心に「支援」がより充実したものとなるようにしていきたい。</li> <li>・「のびっこクラブ」で学んだ保育士が増えることで<u>確実に支援の幅は広がっている</u>と感じている。先生方の苦勞、不安が少しでも減り、子ども達は保育所で過ごしやすくなるというどちらにも良い環境が整うように願っている。</li> <li>・現任者にはこの1年の学びを保育に活かして欲しい。悩み等、相談し合える職員（仲間）がいることは良い。</li> <li>・様々な対応の仕方、気づきのきっかけなどを学ぶことができた。今後、更に支援の必要な子が増えることが予想されるので、さらなる学びを深めていけばと思う。</li> <li>・学びを継続し、本人に合った支援で発達を促せる職員が増え、保護者とともに地域の子育て環境づくりを行いたい。</li> </ul>

## ハ 代替保育士・幼稚園教諭アンケート調査結果

事業終了後に本事業に代替保育士・幼稚園教諭（以下、「代替保育士等」という）に郵送によるアンケート調査を実施した（6人送付。回答率83.3%）。

アンケートでは、事業について感じたことに関して、代替保育士等に「依頼の仕方」「事前説明」「賃金」「依頼頻度」の4項目について「1 不適切だった、2 やや不適切だった、3 やや適切だった、4 適切だった」の4択で尋ねた。（表24参照）

アンケートでは、いずれの項目に対しても「適切だった」との回答で、評価が高かった。代替職員等説明会を開催し、事業周知に努めたことも肯定的に捉えられたと考えられる。

表24 代替保育士等アンケート結果（事業について感じたこと）

問い	不適切だった	やや不適切だった	やや適切だった	適切だった
依頼の仕方	—	—	—	4人
事前説明	—	—	—	4人
賃金	—	—	—	4人
依頼頻度	—	—	—	4人

また、代替保育士等として勤務した中で感じたことに関して、代替保育士等に「現場での仕事への不安（勤務前）」「現場での仕事への不安（勤務後）」「松島町の支援に寄与できることのやり甲斐」「仕事を通じたやり甲斐」「職員間のコミュニケーションの取りにくさ」「子どもの対応の難しさ」の4項目について「1 不適切だった、2 やや不適切だった、3 やや適切だった、4 適切だった」の4択で尋ねた。（表25参照）

「現場での仕事への不安」については、勤務前後で大きな変化はなく、いずれも「あまりなかった」、「なかった」の割合が大きい。

「松島町の支援に寄与できることのやり甲斐」や「仕事を通じたやり甲斐」は、「あった」、「少しあった」の回答であり、代替保育士等として勤務する中でやり甲斐を感じていただいている。

「職員間のコミュニケーションの取りにくさ」や「子どもの対応の難しさ」については「なかった」、「あまりなかった」の割合が高く、現役時代の経験も活かしながら、二年目の実践でもあり、スムーズに対応いただくことができた。

表25 代替保育士等アンケート結果（代替職員勤務の中で感じたこと）

問い	あった	少しあった	あまりなかった	なかった
仕事への不安（勤務前）		1人	2人	1人
仕事への不安（勤務後）			2人	2人
松島町支援寄与のやり甲斐	2人	2人		
仕事のやり甲斐	2人	2人		
職員間のコミュニケーション困難		1人	1人	2人
子どもの対応困難			2人	2人

また、「事業において、代替職員が配置されたことについての御見解をお書きください。」「この事業についての感想をお書きください。」の2点についても自由記載によるアンケート調査を実施した（表26参照）。なお代替保育士等の配置については、5人全てが「非常に良い」と回答し、代替保育士等にとっても評価が高かった。

代替職員配置については、「同じ施設で約1年にわたり代替職員として配置され、職員の役に立てたこと、子ども達の成長ぶりを共にみることができ、やり甲斐を感じた」、「色々、対応して頂き、働きやすかった」等の意見があり、職場の配慮の下でやり甲斐を感じながら勤務いただいたことが読み取れる。

感想としては「のびっこグループとスーパーバイザーグループができ、確実に事業として進んでいる」、「大変内容のある事業で、先生方にとっては、本当に今後役に立つ」など事業を高く評価して頂いている一方で、「本来の保育の準備や教材研究などの時間が足りなくて苦労している姿も見られ、保育者の負担軽減が必要」と本来業務とのバランス調整が課題となる旨の意見もあった。

表 2 6 代替保育士等アンケート調査結果（自由記載等）

問い	回答
代替職員配置への御見解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>同じ施設で約1年にわたり代替職員として配置され、職員の役に立てたこと、そして何より子ども達の成長ぶりを共にみる</u>ことができ、<u>やり甲斐を感じた</u>。研修職員が安心して研修に出て行くことができること、また代替職員にとってもやり甲斐を持つことができることに、こうした取り組みが他にも活かされていくことを期待したい。</li> <li>・ 研修に出る先生が安心して事業に参加できるという点で大変良いと思う。</li> <li>・ 研修に行く時、先生がぬけてしまうと、残された先生で子ども立ちをみななければいけないので、そこに保育士が補充になるというのは、研修に行く先生も保育所に残る先生も安心して職務に専念できてとても良いことだと思う。</li> <li>・ <u>色々、対応して頂き、働きやすかった。</u></li> <li>・ 代替職員配置により、支援を勉強される先生が安心して出張できる。</li> </ul>
感想	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2年目を迎え、<u>のびっこグループとスーパーバイザーグループができ、広がりを感じた</u>。また<u>施設での活用を垣間見ることができ、確実に事業として進んでいるように思う</u>。しかしこれからそれぞれが共有して、どう継続していくのかという難しさを感じる。子ども達のため、そして保育者としてますます頑張ってもらいたい。</li> <li>・ <u>大変内容のある事業で、先生方にとっては、本当に今後役に立つもの</u>だと思う。しかし、準備などで大変な面も見られ、本来の保育の準備や教材研究などの時間が足りなくて苦労している姿も見られ残念に思う。保育者にあまり負担にならないようなやり方を考えてもらおうとよいのではないかと感じる。現場でもっと役に立つようさらに工夫してもらえればと思う。</li> <li>・ 支援が必要なお子さんへの指導を工夫するということで大事な内容だと思う。</li> <li>・ 発達障害児を見られるお子さんに対して、どのように接して良いかなど悩みもあったが、報告会などに行かせて頂きとても勉強になった。とても良い事業だと思う。</li> <li>・ 発達障害児に対する理解と支援についての勉強会は大切だと思う。ただ研究発表となると先生方の負担が大きいのではないかとと思う。</li> </ul>

## 「のびっこクラブ」に参加して（Aグループ）

松島町立高城保育所 保育士 飯川 美希

Aグループの対象児は幼稚園年長児4人だったので、「就学に向けて」が大きな課題だった。まずは、一番の支援者である保護者に、集団の中でどんなことにつまずきがあるのかを知ってもらう事、また、本人たちが小学校で困らないようにつまずきに対応する力と自信をつけてもらえるように意識しながらプログラムを考えていった。特にお友達との関わり方・コミュニケーションの取り方や相手に自分の思いを伝えたり相手の気持ちを受け入れたりできるソーシャルスキルアップには力を入れて取り組んできた。

サーキットでは順番を守る大切さを伝えることから始め、最終的には子ども達が相談してサーキットのコースを決めた。パラバルーンで力の加減を意識したり、友達と協力する楽しさを味わえるようにした。福笑いでは自分の思いを言葉に出し、伝わるうれしさを感じることができた。また、活動の終わりに振り返りを行った。振り返りが苦手な子が多かったが、写真やニコちゃんマークを使い、目で見てわかりやすくすることで抵抗なく取り組めた。子ども達も最初は初対面の子も多く緊張した様子もあったが、回数を重ねるうちに友達との関わりが増えたり、少しずつ自分を出せるようになってきたりと、個人差はあるが、成長を感じられた。また、保護者の方も徐々に打ち解け、子ども達への関わり方にも変化がみられるようになりやってきてよかったと嬉しく思った。

これからの課題としては、就学に向けてという大きなねらいの中で、1人ひとりの特性を理解し活動を考えていくことが難しく、藤原先生やスーパーバイザーの先生方に助言を頂きながら実践していくことも多かったため、子どもたちの困り感に向き合い、1人ひとりに応じた働き掛けができるような学びが必要だと感じた。

全体を振り返ってみると、活動のねらい（子どもたちどんなことを伝えたいか）を明確にしたうえで、活動を組み立てていくこと、またそのねらいに対し評価・反省を行い、次の活動に生かしていくことが大切だということが分かった。

また、「のびっこクラブ」を通して、うまくいくことが大切なのではなく、「こうしたら上手かった」「これはもう少し工夫が必要」と狙いに応じた見極めが大切ということを学んだ。

今後、この学びを現場に活かしていきたい。



ふくわらい（中心活動）



自立活動



修了証書

## 「のびっこクラブ」を経験しての感想（Bグループ）

松島第五幼稚園 教諭 吉田 大育

私は今回、発達障害児早期支援体制整備事業で「のびっこクラブ」に参加し、乳幼児期の発達支援方法について3回の座学と5回の実践を通して学ぶことができた。現在松島町では、全国同様に発達障害を抱える子どもが多くなってきており、各幼稚園・保育所に少なくとも1～3人程度在籍している。町の幼稚園教諭や保育士は、その子ども達が日々の保育の中で生活しやすいようにと、日ごろから構造化や援助方法について考え、取り組んでいる。また、年2回程度、東北文化学園大学の藤原加奈江先生に巡回指導として現場に来ていただき、対象幼児への対応方法について指導をもらい保育に生かしてきた。

座学では発達支援方法、また各障害での特徴について学ぶことができた。私は昨年度の「のびっこクラブ」の座学に参加し学んでいたが、改めて学び直すことができた。また今年入職した保育士にとっては、良い学びの場となった。実践では「のびっこクラブ」Bチームに参加した。Bチームは幼稚園、保育所に入園前の2～3歳の未就園児を中心に、5人で行った。体調不良や家庭の用事などで参加がかなわない子がいたり、途中で入れ替わりをする子がいたり、どの回も異なる雰囲気での取り組みとなっていたため、継続した計画を立てることが難しく、どの子にとっても楽しい活動、発達にあった構造化となるよう、保育者間で何度も話し合い、計画を立てて取り組んだ。

構造化としては、各部屋に入室、移動がしやすいようにアンパンマンのカードをポストに入れて、入室するようにしたり、イスにその子ごとに、決まった色と顔写真を貼り、自分の椅子だとわかりやすいようにし、また保護者のイスを隣に置いて子どもが安心できるようにしたりと配慮した。

活動では風船遊びや、車遊びなど子ども達が十分に楽しめるような内容を計画し、活動を進める中でどのような配慮が必要か保育者間で話し合いながら進めていった。子ども達一人ひとりに向き合い、丁寧な配慮を心掛けて行くことで、どの子にも楽しめる活動や環境を設定することができるのだと実感した。

「のびっこクラブ」の後、保護者と臨床心理士、保育者で行ったカンファレンスでは、その日の「のびっこクラブ」の感想や子どもの様子で、気づいたことについて話し合うことができた。また保護者の日ごろの子育ての悩み、発達の不安などを相談する場ともなっていた。家庭での様子や興味のあるものなどの情報を知り、次回の「のびっこクラブ」に生かすこともできた。保護者にとって、なかなか相談できない悩みを専門家に相談できるより良い場となった。また、同じような不安を抱えている保護者同士のコミュニケーションの場にもなり、互いに話し合う姿も見られた。

「のびっこクラブ」を通して、子ども達一人ひとりの特徴を正確に把握すること、そのためには観察や情報収集が大切であると分かった。また、一人ひとりの理解に基づき、活動の計画を立て、実践した内容を振り返って評価・反省をすることで次の活動に生きていくと感じた。保育者同士がチーム一丸となって実践にあたることで、子ども達の特徴を共通理解することができ、全員で同じ対応ができると学んだ。また、カンファレンスを通して、子育てに不安を抱えている保護者の思いに寄り添うことが、保護者の不安を和らげることに繋がったと感じている。

今後の課題としては、今回「のびっこクラブ」で学んだことを幼稚園や保育所の現場に持ち帰り、それぞれの職員間で共通理解し、日々の保育中で実践していくことが求められている。子ども一人ひとりに応じた支援ができ、より良い保育となっていくようこれからも学び続けていきたい。



くるま遊び



果物狩り



猿に果物を食べさせ終わる

## スーパーバイザー研修での学びを通して

松島町立松島保育所 主査保育士 佐藤雅子

### 【「のびっこクラブ」1期生として】

「のびっこクラブ」1期生として昨年度は無我夢中で座学を学び、試行錯誤しながら実践を行ってきた。これまでも日常の保育の中で気になる子どもや発達障害の子どもと関わってきたが、学びの場に参加することで、関わり方だけでなく『構造化』や子どもの発達に合わせた自立課題等、専門的な知識を持って判断していくことの重要性を感じた。

「のびっこクラブ」では複数の保育者が一緒に取り組むため、子どもたち一人一人に合わせた計画を考えようと様々な意見が生まれ、そこから子どもたちの発達に合ったものを取り入れることができ、回数を重ねることで成果もみられた。しかし、実際保育者がそれぞれの職場で支援を行うときはどうか、他の職員との連携はとれるのだろうか、自己判断でよいのだろうか等の課題が見えてきた。発達支援は孤立して考えるものではなく協力し合いながら進めていくものであり、その観点からも今年度のスーパーバイザー研修は、子どもだけでなく、保育者や保護者支援にもつながる機会として期待が大きかった。

### 【スーパーバイザー研修での学び】

発達障害への理解を高めるため、今回も7つのステップシートを使って子どもの困難さやつまずきを捉えることから始めた。今回は新たに支援シートや記入方法を学んだ。子どもを理解し、しっかりとその子どもの『特性に気がつく』ことが重要であり、さらに『分析する力』が求められた。その子どものスキル評価や支援の対応方法を実践したことを発表し、保育者間で共通理解をすることで、保育者の自己肯定感が高まり困り感も減るため、実践につながることを実感した。

支援シートで子どもの目標を設定する際、大きな目標を立ててしまうことがあった。確実にできるような支援につなげるためにも3か月という短いスパンで考えることが大切であり、達成できたら次の目標を定めていくということを学べた時は、大きく視野が広がり、その後の支援に生かしたことは大きな成果につながった。

### 【「のびっこクラブ」でのスーパーバイザーとして】

「のびっこクラブ」1期生として今回は「のびっこクラブ」に「伝える」「教える」「見守る」立場として参加した。昨年度は反省を次に生かそうと必死だった経緯があり、今回も自信よりもまだ不安の方が大きかった。2期生と共に実践に向けた計画を立てているとき、重点を置いて考える部分に変化していることに気づいた。のびっこ1・2回目は1期生として見本となった。3回目の「のびっこクラブ」からは活動の計画を2期生に任せ、計画が決まってから話し合いに参加し、スーパーバイザーとして助言を行い実践終了後には報告書の作成を行った。活動のねらいと個々の特性を理解した上での活動を考える上で悩むことが多かったが、昨年度学んだ構造化や自立課題等では年齢に合ったものを助言することができたように思う。1、2期生共に就学に向けた活動を意識し、同じ方向を向き一緒に考え、振り返りを行えたことで各保育者共にスキルアップにつながり、次に生かす力が身についた。

### 【今回の研修を終えて】

スーパーバイザー研修、そして「のびっこクラブ」のスーパーバイザーとして研修に参加した。発達支援への知識だけでなく、施設全体で支援が必要な子どもたちのサポートや、保育者、保護者へのサポートを学ぶことができた。今回の学びを十分に生かしていけるように、スーパーバイザーとしての自負を持ち、今後も積極的に支援に携わっていきたい。

「のびっこクラブ」の知見の保育等現場での導入例



保育所・幼稚園での自立課題



保育所・幼稚園での構造化



保育所・幼稚園・児童館でのスケジュール



朝の身支度手順カード

コーナー

コーナー

手伝ってカード

片付けの構造化

### 3 ペアレント・メンターの育成支援

#### (1) ペアレント・メンター育成の概要

平成28年度はペアレント・メンターの育成に着手し、啓発研修1回、養成研修1回（2日間）を行い、17人の保護者がペアレント・メンター養成研修基礎講座を修了した。

平成29年度は、ペアレント・メンターの継続育成とともに、養成研修を修了したペアレント・メンターに対してスキルアップ研修の実施に取り組んだ。また、育成したペアレント・メンターに活動する機会に繋げる支援を行った。さらに、県内におけるペアレント・メンターを活用した事業化に向けて、ペアレント・メンター検討会を3回実施した（表27参照）。

表27 ペアレント・メンター研修及びペアレント・メンター検討会

	日時	内容	参加者
第1回	平成29年11月19日（日） 午前11時30分～午後4時	ペアレント・メンター養成研修（基礎講座）① オリエンテーション・自己紹介 発達障がいの基礎知識 発達障がいの家族支援 松島のモデル事業	11人
第2回	平成29年11月20日（月） 午前10時～午後4時	ペアレント・メンター養成研修（基礎講座）② リソースブック 話を聴くうえでの基礎知識と技術 ロープレガイドダンス ロールプレイ 修了証書授与式	13人 平成29年度宮城県ペアレント・メンター養成研修基礎講座修了証書授与者 8人
第3回	平成30年1月31日（水） 午前9時30分～午後4時30分	ペアレント・メンター養成研修（フォローアップ講座） オリエンテーション 福祉，就労，教育関係の制度 自分の経験について話をするときの留意点 ロールプレイとディスカッション グループ相談のポイント グループ相談のロールプレイ 修了証書授与式	19人 平成29年度宮城県ペアレント・メンター養成研修応用講座修了証書授与者 15人

	日時	内容	参加者
第1回	平成30年1月25日（木） 午前10時～午前11時30分	ペアレント・メンター検討会① ペアレント・メンターについて 他県の取組み 宮城県におけるペアレント・メンターについて	8人
第2回	平成30年2月22日（木） 午前10時～午前11時30分	ペアレント・メンター検討会② 宮城県における事業案 ペアレント・メンター啓発パンフレットの検討	9人

#### (2) ペアレント・メンター研修及び活動支援

ペアレント・メンター研修については、平成28年度に引きつづき、特定非営利活動法人 日本

ペアレント・メンター研究会事務局長で鳴門教育大学大学院准教授の小倉正義先生を講師に迎え、11月に養成研修基礎講座を、1月に養成研修フォローアップ講座を実施し、計43人の参加があった。

養成研修基礎講座では8人のペアレント・メンターを育成し、昨年度育成した17人と合わせると、宮城県内のペアレント・メンターは25人となった。

この25人を対象に、養成研修フォローアップ講座を実施したところ、15人の参加があった。

また育成したペアレント・メンターの派遣として「本モデル事業フォローアップ教室（3回）へのメンター参加」、「北部児童相談所 発達障害児者家族支援事業の講師」、「東部児童相談所 発達障害児等支援者研修事業の講師」、「東部児童相談所 発達障害児等家族支援事業の講師」など、8人、10回行った。

来年度以降は、ペアレント・メンター活用啓発研修とペアレント・メンター養成研修フォローアップ講座をを通し更なるスキルアップを図りながら、活動の後方支援策の検討を予定している。

### (3) ペアレント・メンター検討会

ペアレント・メンター検討会を平成28年度に引き続き、平成29年度においても2回実施した。育成したペアレント・メンターを活用した事業化を検討し、他県の制度を参考にしながら、宮城県版のパンフレットの作成について構成員に議論いただいた。（図1参照）

平成30年度から要綱を策定し、発達障害者支援センターにおいてペアレント・メンター派遣制度を開始する予定である。

The image contains two main parts: a flyer on the left and a flowchart on the right.

**Left: Flyer for 'まざらいん みやぎ' (Mazurain Miyagi)**

- Header:** 宮城県発達障害者ペアレント・メンター事業のご案内
- Logo:** まざらいん みやぎ マザーライン
- Text:** まざらいんは宮城県の言葉で「集まりましょう」や「一緒にやりましょう」などの呼びかけの言葉です。ここでは、ママとママ仲間、パパとパパ仲間が中心となります。
- Illustration:** A group of diverse people, including parents and children.
- Section: よりそう 保護者ボランティアネットワーク**
- Circle 1 (きく):** 啓発活動。情報を受けて、研修会や研修会に出向いて、種としての悩みや、体験談などを話し合います。
- Circle 2 (はなす):** グループ相談。保護者が集まる場に出向き、グループ相談の形式で、発達障害のある子どもを育てている保護者の悩みを聞き合います。
- Section: 宮城県発達障害者ペアレント・メンターとは?**
- Text:** 発達障害の子を育てた経験のある先輩保護者が「教養できる相談相手」として現在子育て中の保護者のお話を聴いたり、自身の体験談を話します。メンターは、ボランティアで活動しています。親の会等から推薦を受け、宮城県主催の一定の研修課程を修了しています。メンターは専門家ではないので個別相談に臨むことはできませんが、子育てを経験した親として、共感し、寄り添うことができます。

**Right: Flowchart 'ペアレント・メンターの活用方法について'**

- Flow:** 派遣依頼 (Request) and 実施報告 (Report) flow from the '発達障害者支援センター「えくぼ」コーディネーター' to the 'ペアレント・メンター'. '活動' (Activity) flows from the 'ペアレント・メンター' to the '保護者' (Parents). '報告' (Report) flows from the 'ペアレント・メンター' back to the '発達障害者支援センター「えくぼ」コーディネーター'. 'フォロー' (Follow-up) flows from the '発達障害者支援センター「えくぼ」コーディネーター' to the 'ペアレント・メンター'.
- Section: 開催スケジュール**
- Timeline:**
  - 5分前: ①メンター派遣依頼
  - 1分前: ②メンター派遣依頼
  - 当日: ③メンター活動実施
  - 1分前: ④実施報告書提出
- Text:**
  - ①派遣依頼は、発達障害者支援センター「えくぼ」に電話またはメールで、活動日時、活動場所、活動内容、活動対象者について事前に相談をお願いします。
  - ②宮城県発達障害者支援センター「えくぼ」がペアレント・メンターの派遣依頼を行います。派遣するメンターが決定したら、宮城県発達障害者支援センター「えくぼ」から派遣依頼書を送付し、お返事をお願いします。
  - ③当日はペアレント・メンターが会場に出向き、メンター活動を行います。派遣依頼書にて各ペアレント・メンターが参加します。
  - ④派遣依頼書は、実施終了後、1か月以内に宮城県発達障害者支援センター「えくぼ」に実施報告書をお返しいたしてください。
- Notes:**
  - ①派遣依頼は、発達障害者支援センター「えくぼ」に電話またはメールでお返しいたしてください。
  - ②グループ相談は、実施は無料ですが、交通費等の実費負担をお願いします。
  - ③開催については、宮城県のホームページまたは宮城県発達障害者支援センター「えくぼ」のホームページからダウンロードできます。
- Section: ペアレント・メンター派遣の問い合わせ先**
- Text:**
  - 宮城県発達障害者支援センター「えくぼ」
  - 〒981-3213 宮城県仙台市東区南中山5丁目2番1号
  - 電話022-376-5306 (夜間・日曜・祝日・年末年始を除く) 9:00~18:30

図1 宮城県発達障害者ペアレント・メンターパンフレット

### 【研修参加前の活動について】

私たちいるかの会は、松島町在住のいろいろな障がいを持つ子どもを育てる親の会である。

会の活動の中の月に一度の定例会では、家庭や学校、園での生活についてなど地元地域ならではの情報交換や先輩お母さんからのアドバイスなどを、茶話会形式で行っている。それぞれ障がいは違っても就学就園時や集団生活の中でのアクシデントへの対応など先輩の経験談はとても参考になる。いつも楽しく活動している。

### 【ペアレント・メンター研修講座を受講して】

いるかの会関係からは合計4人がペアレント・メンターの研修講座を受講し、修了することができた。講座では、座学と、グループによるロールプレイを学ばせていただいた。いるかの会での活動のなかにも、広い意味でメンターの活動と共通している事柄もあり、身近に感じられるものもある一方、いつもの狭い地元地域の中だけではなく、まったく環境の異なるところの方々と今まで自分の経験したことがない事例への対応の仕方などがとても勉強になった。

とくに感じたことは、話を”聴く”ことの大切さだった。ペアレント・メンターとしての役割は、同じ親として、仲間の子育ての悩みに”共感”して話を”聴く”ことである。そして話の中での”言葉選びの難しさ”，同じ言葉も言い方、声の調子、速度、大きさなどにより受け取り方が大きく変わることをロールプレイの中で学んだ。

とくに専門家ではない同じ立場の親として、難しいものではなく、いつもの自分の”ことば”をつかうことで、自分の思いをより相手につたえることができるのではないかということを感じた。

グループによるロールプレイでは、人前で話をしたり、初めてのことに戸惑いながらも実際に体験することで新たなことに気がつき、注意をするようにこころがけることを学んだ。

### 【ペアレント・メンター活動】

宮城県東部児童相談所から依頼があり、平成 29 年度発達障害児等支援者研修事業にて、いるかの会 3 人で、地域の幼稚園、保育所の先生方を対象とした研修会の講師の機会を頂いた。

平成 29 年 10 月 19 日に石巻合同庁舎会議室で行われた。

内容は”聞いてみよう！発達障がいのこそだてのこと～保護者の体験を通して～”だった。人前で話し慣れていない私たちのため、職員が進行を工夫しインタビュー形式でうまくまとめて進めていただいた。

講演のテーマは「子供の障がいを知ったときの気持ち」、「心配不安の乗り越え法と支えになってくれた人」、「幼稚園や保育所などで役に立った支援」、「幼稚園や保育所などスタッフとの情報共有法」などで三人三様の子育てをそれぞれに、うちの場合はこうでしたと、特に小さかったころのエピソードをとりあげた。皆違ったタイプの子どものためいろいろなアプローチの支援法となることを知っていただくことができた。

幼稚園、保育所の先生方が多く対象者としていらしたのでその年代の話がメインとなったがどの様な話を求められているかを打ち合わせの段階からすり合わせ出来ていたので良かった。

この講演で私たち三人は、初めての活動のため、終わって見たもののどの様につたわっていたのか反応がとても心配だった。先生方のアンケートの結果をいただき、とてもありがたい言葉を多くいただいた。一方で反省の材料もあった。勉強していければと思っている。

### 【最後に】

今回いろいろな経験の機会をいただいたこと、本当に感謝している。一人の母親ですが、たくさんのことを学ぶことができた。これからも、会の活動などに少しでも活かしていきたい。

関係いただいた皆様、大変お世話になりました。

### 第3章 考察

松島町における2年間のモデル事業の取り組みの中では、発達のが気になる子どもを早期に発見し、身近な場所において、地域の人材による療育の機会を提供し、保護者の力も取り入れながら、社会資源の少ない自治体においても発達支援を行える体制整備に取り組んだ結果、以下の3点における効果が認められた。

- ① 健診において発達のアセスメントを継続することで、17人の陽性、うち11人が要フォローとなり、発達が気になる子の早期発見に繋がった。また市町村への普及に向け、県内の母子保健担当保健師の発達評価における質の向上を目的とした研修を開催した。
- ② 子育て支援センター（児童館）における療育支援が定着化し、また、保育所・幼稚園においても、発達への療育が浸透しつつある。
- ③ 発達が気になる児童の育児に悩む保護者への支援として、ペアレント・メンターが活躍する仕組みのスタートラインが整備された。

松島町では、2年間の取り組みにより健診における早期発見や子育て支援センター等における早期療育といった一連の支援体制を重層的に構築出来た。ペアレント・メンターによる保護者支援とともに、資源が限られた地域においても早期発見・早期療育が出来る発達支援の取り組みを県内全体に定着・発展させるとともに、今後は、ライフステージに応じた切れ目のない支援体制づくりが望まれる。

## おわりに

東北文化学園大学医療福祉学部教授（発達障害児者支援モデル事業マネージャー）

藤原 加奈江

関係機関の連動と地域人的資源のスキル・アップによる持続可能な発達障害支援システムの構築を目指したモデル事業、2年目の最大の課題は「持続可能」を実現するための取り組みとなった。それぞれが点であった乳幼児健診、保育所・幼稚園、相談事業、母子通園などが繋がり、健診から個別の相談である「ひろば」へ、そして小集団での支援の場「のびっこクラブ」への軸ができ、保育所・幼稚園と通園施設が「のびっこクラブ」に関わることで面としての広がり、1年目に作られた。「のびっこクラブ」における保育士・幼稚園教諭のスキル・アップ・プログラムは、評価シート活用して発達障害の特徴理解を、構造化と発達課題の作成を通し支援スキルの向上を促進し、更に「のびっこクラブ（前半は小集団療育、後半は保護者グループ・ワーク）」でグループ・ワークに参加することで保護者理解の機会を、また、チームで協力して療育プログラムを作りあげることによってチーム・アプローチの機会を提供した。

2年目の「のびっこクラブ」は、年々増加傾向にある高機能自閉症スペクトラム、いわゆるグレーゾーンの子供たちへの対応、また、参加メンバーが固定しないグループへの対応を学ぶという、よりチャレンジングな取り組みを設定した。特に参加メンバーが固定しないグループは、健診から随時紹介されて参加する本来の「のびっこクラブ」の形態に即したもので、対象児が集団療育に適した状態にあるのかの評価及び様々な発達レベル、障害特徴を持ったグループでどんな活動が適しているのかを考える取り組みであった。更に、昨年研修を終えた一期生には今年度はスーパーバイザー研修を行った。3回の座学で障害特徴の評価法再確認、統合保育のクラス運営、個別指導計画について学び、各職場で対象児がいる場合はその実践支援、そうでない場合は他職員へのスーパービジョンを行った。また、その中の4人に「のびっこクラブ」にチーム・リーダーとして二期生を育てる役割を果たしてもらった。二年目にしてスーパーバイザーの役割を課された一期生はその難しさを実感しながらも確実にその任を果たし、プログラムの持続可能性に明るい展望をもたらした。

乳幼児健診でのM-CHATの活用と「ひろば」「のびっこクラブ」へ繋がりも定着しつつあり、また、昨年度「のびっこクラブ」参加の保護者フォローアップ教室へのペアレント・メンターの参加と、各取り組みが連動して行われたことの意義は大きい。代替保育士制度に快く協力して下さった先輩方、力強くバックアップして下さった行政の方々に見守られて今回の取り組みは初めて実現した。顔の見える繋がり、暖かな応援の思いが「松島町で子育てするのは安心」「松島町で仕事をするのは楽しい」を育み、面であった支援が立体へ、すなわち血の通ったものとなることを学んだ2年間であった。

私の、遥か40年近く前の学生時代、保育の学びの多くは健常児が対象であり、発達障害についての知識は「知っていたほうが良い」といった程度の認識であった。しかしながらここ最近の保育現場においては、発達障害についての知識がなければ保育などできないと言っても過言ではない。

松島町の巡回心理相談は、平成13年度子育て支援センターの立ち上げと同時に始まった。初めころは母親からの相談件数が多かったが、次第に幼稚園・保育所の現場からの相談が多くなり、また子どもの様子も複雑になってきた。担任がアドバイスを受けても、翌年に担任が替わればまた振り出しに戻り、指導の継続ができずにノウハウが蓄積されにくい状況にあった。専門の先生に頼るばかりでなく、何とか町として自給自足の支援ができないかを模索しているところに、昨年発達支援モデル事業のお話があり、保育現場の職員で取組んで2年が経過した。

モデル事業の3本柱（①発見の場としてのM-CHATを使った1歳6か月健康診査、②現任者の学びの場「のびっこクラブ」、③ペアレント・メンターの養成研修）をさらに充実させながら、それぞれの立場で2年目に取り組んだ。

昨年に比べ、健診後に保健師から勧められた相談事業が増え、「のびっこクラブ」に繋がる件数も増えた。また、今年度の、前年に学んだ職員が保育の現場やフォローアップ教室で現任者にスーパーバイズしながら共に学び合うシステムは、悩みを共有したり検討を繰り返しながら、孤立せずにチームで保育に当たる意識を高められたと感じている。

研修中は、先輩保育士や幼稚園教諭が後輩の学びのために継続して代替職員として支えてくれた。また、メンターの養成研修を受けた障害児をもつ親の会の3人が児童相談所から依頼され講師を務めたり、のびっこクラブ保護者との交流を持つことにも繋がった。

未就学の段階から、小学校に入りそして中学校へと上がっていくにつれ子どもの生活環境は複雑になる。子どもたちがいろいろな問題にぶつかった時に解決できるスキルを身につけてほしい。それをなるべく早い時期に見つけて支援していきたい。支援の繋がり的重要性について学んだ職員はそんな気持ちでいる。「のびっこクラブ」で学んだ発達支援者養成研修の認定保育士が各施設に増えることで、本人に合った支援で発達が促がしていく保育仲間が増え、保護者と共に地域で子育てしていく環境づくりの足がかりにしたい。幼稚園教諭と保育士が所属の垣根を越え、小さい町ならではのフットワークの良さと、職員の学びへの意欲を社会資源として、このモデル事業が確実に定着してきている。

これからの継続が、まさに町の宝になっていく。

今回わが町にこのような学びの機会を与えていただき、厚生労働省、発達障害児者支援モデル事業マネージャーである東北文化学園大学医療福祉学部教授の藤原加奈江先生、関係者の皆様に大変感謝している。この場を借りて厚くお礼を申し上げたい。

## 参考資料

### 平成29年度宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業実施要綱

(趣旨)

第1 この要綱は、平成29年度宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業（以下「モデル事業」という。）の実施に関して必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2 モデル事業は、県内市町村からモデルとなる一団体を選定し（以下「モデル市町村」という。）、当該市町村において自閉症やアスペルガー症候群等の広汎性発達障害、学習障害及び注意欠陥多動性障害等の発達障害児者並びにその家族が地域で安心して暮らしていけるよう、発達障害児者の支援ニーズや成長段階に応じた支援手法の開発、分析及び検証等を行うことにより、市町村における発達障害児者に対する有効な支援方法の確立を図ることを目的とする。

(実施主体)

第3 モデル事業の実施主体は、宮城県（以下「県」という。）とする。ただし、県は事業の一部を適切に事業が実施できると認められる市町村に委託することができるものとする。

(モデル事業の内容)

第4 モデル事業は、次に掲げる事業を実施する。

(1) 幼児健康診査におけるアセスメントツールの開発

モデル市町村で実施する幼児健康診査に、発達障害児者の支援の尺度となるアセスメントツールを導入し、その効果を検証することで、アセスメント手法の開発を行う。また、市町村、関係機関等にアセスメントツール導入を促進するため、研修を実施する。

(2) 資源の限られた地域における幼児発達支援手法の開発

モデル市町村において、幼児健康診査で要支援と判定された発達障害やその疑いのある就学前の子どもに対して発達支援を行い、その効果を検証することで、行動障害・二次的障害の「予防」のための効果的な幼児発達支援手法の開発を行う。

なお、実施に当たり、現任者所属先の保育所及び幼稚園の運営に支障を及ぼさないよう、当該保育所及び幼稚園に代替保育士及び代替幼稚園教諭を配置の上、実施するものとする。

イ 保育士・幼稚園教諭等の現任者のスキルアップ研修

ロ 前年度事業参加保護者を対象としたフォローアップ教室

ハ 平成28年度発達支援養成研修基礎講座修了者を対象としたスーパーバイザー研修

ニ モデル事業を通して得たノウハウや成果について県内への普及を図る市町村体制強化研修

ホ 地域の支援体制構築に資するため、県内関係者を対象とした発達障害児者地域生活支援モデル事業報告会

(3) 家族支援体制整備の開発

ペアレント・メンターの養成に必要な研修等を実施し、家族の支援及び家族同士で支援できる体制の構築に向けた開発を行う。

(委員会等の設置)

第5 県は、モデル事業を円滑かつ効果的に実施するため、次に掲げる委員会等を置く。

(1) 宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業企画・推進委員会（以下「企画・推進委員会」という。）

(2) 発達障害児者支援モデル事業マネージャー及び発達障害児者支援モデル事業マネージャー補助（以下「マネージャー等」という。）

(3) 宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業アセスメント検討会（以下「アセスメント検討会」という。）

- (4) 宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業ペアレント・メンター検討会（以下「ペアレント・メンター検討会」という。）

（企画・推進委員会）

第6 企画・推進委員会は、次に掲げる業務を行うものとし、その組織及び運営については別に定める。

- (1) 県内における発達障害児者の支援ニーズ及び体制整備等に関する実態の把握
- (2) 前号の実態把握を踏まえたモデル事業の実施計画策定
- (3) モデル事業の実施状況等の評価、とりまとめ
- (4) 発達障害児者の成長段階に応じた支援方法の開発
- (5) 第7に規定するマネージャーを通じた県に対する指導及び助言等

（マネージャー等）

第7 第5(2)に規定するマネージャー等は、相当の経験及び知識を有する者又はそれと同等と認められる者をそれぞれ1人とする。

2 マネージャー等は、発達障害児者の支援に関わる病院、保健センター、障害福祉サービス事業所、就労支援機関、学校その他の関係機関及びその職員と密接な連携の下、次に掲げる業務を行うものとする。

- (1) 委託事業の進行管理
- (2) 企画・推進委員会と県やモデル事業実施者との連絡調整
- (3) 地域の課題把握、実施計画の策定、実施結果の取りまとめ及び評価に対する実務的な見地からの提言

（アセスメント検討会）

第8 アセスメント検討会は、県及び関係機関の職員で構成し、支援手法の効果測定、第4(2)に規定するアセスメント手法の開発等を行うものとする。

なお、アセスメント検討会の開催について必要な事項は別に定める。

（ペアレント・メンター検討会）

第9 ペアレント・メンター検討会は、県及び関係機関の職員で構成し、第4(3)に規定する家族支援体制整備の開発等を行うものとする。

なお、ペアレント・メンター検討会の開催について必要な事項は別に定める。

（関係機関との連携）

第10 県は、必要に応じて、専門的な見地からの意見・人材等を求めるなど、宮城県発達障害者支援センターと連携してモデル事業を実施するものとする。

2 県は、モデル事業の実施に当たって、宮城県発達障害者支援センター連絡協議会・広域特別支援連携協議会合同会議、宮城県発達障害者体制整備検討会との連絡を密にし、相乗効果が得られるよう配慮するものとする。

（留意事項）

第11 県は、事業の実施に当たって、事業の趣旨・内容を十分に説明し同意を得るなど、その権利擁護に配慮する。

2 委託事業に従事する者は、事業により知り得た個人情報等を漏らしてはならない。また、事業終了後及びその職を退いた後も同様とする。

（その他）

第12 この要綱に定めるもののほか、この事業の実施に関して必要な事項は、別に定める。

附 則

- 1 この要綱は、平成29年8月25日から施行し、平成29年4月1日から適用する。
- 2 この要綱は、平成30年3月31日限り、その効力を失う。

## 平成29年度宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業企画・推進委員会開催要領

### (設置)

第1 宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業企画・推進委員会（以下「委員会」という。）は、宮城県内のニーズや体制整備の状況等を勘案し、発達障害児者の実態について把握した上で、発達障害児者支援モデル事業の実施計画の策定及び支援手法の開発を行うことを目的として開催する。

### (業務)

第2 委員会は、次に掲げる業務を行うものとする。

- (1) 発達障害児者地域生活支援モデル事業の実施計画の策定に関すること
- (2) モデル事業の評価、取りまとめに関すること
- (3) 支援手法の開発に関すること
- (4) その他上記に関連すること

### (構成等)

第3 委員会は、別表に掲げる者（以下「委員」という。）及び発達障害児者支援モデル事業マネージャーの出席によって開催する。

### (委員会運営)

第4 委員会には委員長及び副委員長を置く。

- 2 委員長は、委員の互選により選任する。
- 3 副委員長は、委員長の指名により選任する。
- 4 委員長は、委員会の進行を行う。
- 5 委員長は、必要に応じて、委員以外の者に委員会への出席を求めることができる。

### (事務局)

第5 委員会の庶務は、障害福祉課において処理する。

### (その他)

第6 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営について必要な事項は、委員会で協議する。

### 附 則

- 1 この要領は、平成29年8月25日から施行する。
- 2 この要領は、平成30年3月31日限り、その効力を失う。

### 別表（第3関係）

分野	構成員数	摘要
学識経験者	1人	
障害児者支援施設	5人	
当事者保護者団体	2人	
県保健福祉行政関係者	1人	
町保健福祉教育行政関係者	5人	

平成29年度発達障害児者地域生活支援モデル事業企画・推進委員会 出席者名簿

(敬称略)

	所属	職名	氏名	備考
1	東北福祉大学総合福祉学部	教授	三浦 剛	委員長
2	社会福祉法人宮城県社会福祉協議会 宮城県発達障害者支援センター	所長	石川 仁	
3	社会福祉法人松島町社会福祉協議会	会長	遠山 勝雄	
4	社会福祉法人矢本愛育会 障害児デイケアセンターこどもの広場	センター長	小野 隆一	
5	認定NPO法人 さわおとの森	副理事長	高橋 繁夫	
6	特定非営利活動法人 自閉症ピアリンクセンターここねっと 仙台市自閉症相談センター	センター長	黒澤 哲	
7	宮城県自閉症協会	会長	目黒 久美子	
8	いるかの会	会長	遠藤 由美子	
9	宮城県仙台保健福祉事務所	所長	三浦 正之	
10	松島町町民福祉課	課長	太田 雄	副委員長
11	松島町健康長寿課	課長	児玉 藤子	
12	松島町教育委員会教育課	課長	三浦 敏	
13	松島町立松島第一幼稚園	園長	鎌田 敦子	
14	松島町立高城保育所	所長	石川 ひろみ	

■発達障害児者地域生活支援モデル事業マネージャー

東北文化学園大学医療福祉学部	教授	藤原 加奈江
----------------	----	--------

■発達障害児者地域生活支援モデル事業マネージャー補助

松島町児童館	館長	伊藤 かおる
--------	----	--------

## 平成29年度宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業アセスメント検討会開催要領

### (目的)

第1 宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業における各種アセスメント手法に関する検討を行うため、宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業アセスメント検討会（以下「検討会」という。）を設置する。

### (業務)

第2 検討会は、次に掲げる業務を行うものとする。

- (1) 幼児健診におけるアセスメントに関する検討
- (2) 本事業の効果測定のためのアセスメントに関する検討
- (3) その他必要な事項

### (構成)

第3 検討会は、学識経験者、県内市町村の職員、保健、福祉の関係部局及び機関の職員、その他検討会が必要と認める者をもって構成する。

### (検討会運営)

第4 検討会には座長を置くこととし、構成員の互選により専任する。

2 座長が不在の時は、予め座長が指名した者がその職務を代理する。

3 検討会は、必要の都度、障害福祉課長が構成員を招集し、座長が会議を統括する。

4 座長は、必要に応じて、構成員以外の者に検討会への出席を求め、意見を聴くことができる。

### (事務局)

第5 検討会の事務局は、障害福祉課内に置く。

### (秘密の保持)

第6 検討会に出席した者は、委員会において知り得た個人情報等に関することを、他に漏らしてはならない。

### (その他)

第7 この要領に定めるもののほか、検討会の運営について必要な事項は、検討会で協議する。

### 附 則

1 この要領は、平成29年8月30日から施行する。

2 この要領は、平成30年3月31日限り、その効力を失う。

平成29年度発達障害児者地域生活支援モデル開発事業 アセスメント検討会 構成員名簿

(敬称略)

	所属	職名	氏名	備考
1	東北文化学園大学医療福祉学部	教授	藤原 加奈江	座長 発達障害児者地域生活支援 モデル事業マネージャー
2	松島町町民福祉課	こども支援班長	田瀬 高広	
3	松島町健康長寿課	主査（保健師）	渡邊 恵美	
4	松島町児童館	館長	伊藤 かおる	発達障害児者地域生活支援 モデル事業マネージャー補助
5	松島町児童館	保育士	尾形 優衣	
6	宮城県子育て支援課	技術主幹	中嶋 亜希子	
7	宮城県中央児童相談所	技術主幹(判定指導班長)	伊藤 紀子	

平成29年度宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業ペアレント・メンター検討会開催要領  
(趣旨)

第1 平成29年度宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業ペアレント・メンター検討会（以下「検討会」という。）の開催等については、平成29年度宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業実施要綱に定めるもののほか、この要領の定めるところによる。

(構成)

第2 検討会は、次に掲げる団体等をもって構成する。

- (1) 学識経験者
- (2) 当事者団体、親の会
- (3) 県内市町村
- (4) 福祉の関係部局及び機関
- (5) その他検討会が必要と認める者

(運営)

- 第3 検討会には座長を置くこととし、構成員の互選により選任する。
- 2 座長が不在の時は、予め座長が指名した者がその職務を代理する。
  - 3 検討会は、必要の都度、障害福祉課長が構成員を招集し、座長が会議を統括する。
  - 4 座長は、必要に応じて、構成員以外の者に検討会への出席を求め、意見を聴くことができる。

(庶務)

第4 検討会の庶務は、保健福祉部障害福祉課において処理する。

(秘密の保持)

第5 検討会に出席した者は、委員会において知り得た個人情報等に関することを、他に漏らしてはならない。

(その他)

第6 この要領に定めるもののほか、検討会の運営について必要な事項は、検討会で協議する。

附 則

- 1 この要領は、平成30年1月25日から施行する。
- 2 この要領は、平成30年3月31日限り、その効力を失う。

平成29年度ペアレント・メンター検討会 構成員名簿

(敬称略)

	所属	職名	氏名	備考
1	あおいそらの会	会長	蜂谷 守康	
2	石巻広域 SST の会 アドベンチャークラブ	代表	櫻井 育子	
3	いるかの会	会長	遠藤 由美子	
4	宮城県自閉症協会	会長	目黒 久美子	
5	松島町児童館	館長	伊藤 かおる	座長 発達障害児者地域生活支援 モデル事業マネージャー補助
6	宮城県発達障害者支援センターえくぼ	主査	高橋 伸一郎	
7	石巻祥心会 相談支援事業所ふりーすぺーす”SORA”	管理者	齋藤 康隆	
8	宮城県保健福祉部子育て支援課	主任主査	高橋 学	
9	宮城県保健福祉部東部児童相談所	主任主査	洞口 真紀	

## 宮城県発達支援者養成研修及びペアレント・メンター養成研修実施要綱

### (目的)

第1 この要綱は発達障害の支援に必要な知識及び技能を身につけ、発達障害児者の支援に当たる人材を養成することを目的とした発達支援者養成研修及びペアレント・メンター養成研修について必要な事項を定めるものとする。

### (実施主体)

第2 この事業の実施主体は、宮城県とする。

### (研修課程)

第3 研修課程は、次の4課程とする。

- (1) 宮城県発達支援者養成研修基礎講座
- (2) 宮城県発達支援者養成研修応用講座
- (3) 宮城県ペアレント・メンター養成研修基礎講座
- (4) 宮城県ペアレント・メンター養成研修応用講座

### (受講対象者)

第4 発達支援者養成研修の対象者は、モデル地区の保育所、幼稚園、障害児施設、保健センター職員等とする。

2 ペアレント・メンター養成研修の対象者は、発達障害児者の子育て経験を活かして支援に当たることができる親、または支援機関の職員等とする。ただし、ペアレント・メンター養成研修の修了証書は発達障害児者の子育て経験のある親にのみ発行する。

### (研修内容)

第5 発達支援者養成研修基礎講座のカリキュラムは3日間の座学及び5日間の実習とし、全課程の8割を超えて出席すれば修了とする。

2 発達支援者養成研修応用講座のカリキュラムは3日間の座学及び実習・実践とし、全課程の8割を越えて出席すれば修了とする。

3 ペアレント・メンター養成研修基礎講座のカリキュラムは2日間の座学及び実習とし、全課程に出席すれば修了とする。

4 ペアレント・メンター養成研修応用講座のカリキュラムは2日間の座学及び実習とし、全課程に出席すれば修了とする。

### (修了証書の公布)

第6 知事は、研修修了者に対し、別記様式第1号を交付するものとする。

### 附 則

- 1 この要綱は、平成29年11月20日から施行する。
- 2 この要綱は、平成30年3月31日限り、その効力を失う。

「平成29年度宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業市町村体制強化研修」  
実施要領

1 目的

宮城県が、松島町をモデル地域として実施する標記事業において、市町村職員及び保育士、幼稚園教諭等を対象とする発達障害支援に係るスキルアップ研修等を実施し、県内市町村における発達障害児者に対する早期支援体制の整備促進・強化を図るもの。

2 研修内容（詳細は別紙のとおり）

(1) 早期支援体制整備出前講座（以下、「出前講座」という。）

市町村からの依頼により、松島町で実施する①健診ツール導入支援、②現任者スキルアップ研修の支援、③ペアレント・メンターの育成支援による、早期支援体制整備に係るノウハウ及びその成果の伝達講座

(2) 現任者スキルアップ研修体験講座（以下、「体験講座」という。）

松島町外の保育士及び幼稚園教諭を対象に、発達障害児における自立課題の把握や支援等の学びを目的として、松島町児童館で実施する現任者スキルアップ研修に参加する体験型講座

3 主催

宮城県（松島町に委託）

4 対象者

(1) 市町村職員及び関係者

(2) 保育士、幼稚園教諭。ただし、1日につき1人を定員とし、実施日に終日参加することを条件とする。

※ (1)、(2)ともに松島町を除く。

5 申込方法

別紙1に必要事項を記入の上、出前講座を希望する場合は市町村担当課から、体験講座を希望する場合は所属する機関を通じて、希望日の概ね1か月前までに、7の申込先宛て直接申し込むこと。

6 費用

両講座ともに無料とする。なお、資料は主催者が用意する。

ただし、出前講座において会場使用料等が発生する場合は、申込者が負担すること。

7 申込先

松島町児童館 担当者 尾形、伊藤

電話 022-354-6888

FAX 022-355-1022

8 本事業に関する問い合わせ先

宮城県保健福祉部障害福祉課 在宅支援班 川越

電話 022-211-2543

(別紙)

(1) 早期支援体制整備出前講座

下記のメニューの中から、申込者の希望に応じて内容を組み合わせ、講師を派遣する。(講義の時間は、概ね1時間程度)

- ① 宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業について
- ② 健診ツール導入について
- ③ 現任者スキルアップ研修(のびっこクラブ)について
- ④ ペアレント・メンターの育成について

(2) 現任者スキルアップ研修体験講座

現任者スキルアップ研修体験講座は以下のタイムスケジュールで実施する。本講座は、松島町外の保育士及び幼稚園教諭を対象とする(ただし、一日一人の受け入れ)。

なお、希望者は以下の実施予定日から希望日を選んで申し込むこと。

○ タイムスケジュール

時 間	内 容
午前9時30分まで	松島町児童館に集合
午前10時00分～10時30分	打合せ
午前10時30分～11時00分	松島町の保育士・幼稚園教諭による療育支援の実施 (通称「のびっこクラブ」)
午後11時00分～午後0時	親セッションと子どもセッションに分かれて実践
午後0時～午後1時	片付け・休憩・昼食
午後1時～午後3時	東北文化学園大学藤原加奈江教授を交えての、のびっこクラブの振り返り、次回に向けた改善点の洗い出し等
午後3時	片付け・終了

○ 現任者スキルアップ研修実施予定日

番号	日 程	グループ名	番号	日 程	グループ名
①	平成29年8月31日(木)	A	⑥	平成29年12月12日(火)	B
②	平成29年9月26日(火)	B	⑦	平成30年1月16日(火)	A
③	平成29年10月17日(火)	A	⑧	平成30年1月30日(火)	B
④	平成29年11月7日(火)	B	⑨	平成30年2月5日(月)	A
⑤	平成29年11月21日(火)	A	⑩	平成30年2月8日(木)	B

※Aグループは主に5歳以上、Bグループは主に4歳以下を対象のグループとなっている。

# まちの話題

## 広げよう発達支援の輪

2月16日、アトレ・る Hall（文化観光交流館）で、「平成29年度宮城県発達障害児者地域生活支援モデル事業報告会 in 松島」が開催され、町内外の児童福祉関係者や教育関係者ら約130人が出席しました。

報告会では、モデル事業の概要と、「のびっこクラブ」に携わった保育士や幼稚園教諭による実践報告がありました。

平成29年度の「のびっこクラブ」は、厚生労働省モデル事業の県委託事業として実施しましたが、今後は松島町の事業として、支援体制づくりを継続的に行っていきます。

※「のびっこクラブ」とは、児童館において町内の保育士、幼稚園教諭が療育支援を通じた実践研修を行い、町全体の支援スキルの向上を図る取組みです。



▲東北文化学園大学 藤原加奈江教授による事業総括



▲修了証を授与された保育士・幼稚園教諭のみなさん